

## 〈研究ノート〉

# 群馬県玉村町所在・砂町遺跡出土の北陸系土器の位置づけをめぐって

深 澤 敦 仁・中 里 正 憲

- |                |           |
|----------------|-----------|
| 1 はじめに         | 4 編年の位置づけ |
| 2 動向・目的        | 5 おわりに    |
| 3 砂町遺跡出土の北陸系土器 |           |

## —— 要 旨 ——

本稿は、群馬県佐波郡玉村町所在・砂町遺跡出土の北陸系土器を編年的に位置づけることを目的とする。

組上に載せる2点の土器は、その製作地は定かでないものの、形態及び技法的特徴から、古墳時代前期に北陸地域に分布する甕形土器であり、群馬県内の北陸系土器としても良好な資料である。しかし、この2点の北陸系土器には共伴遺物がなく、在地編年との直接対比ができない。そこで、3つの作業を経ることで、この土器の編年の位置付けを試みた。

【作業1】では、北陸地域における「千種甕」の型式変化とその時期について確認し、その結果との対比を行った。

【作業2】では、砂町遺跡が所在する「前橋南部地域」における北陸系土器の様相をS字甕編年を軸に伺い、その様相に対比させた。

【作業3】では、群馬県内各地域における北陸系土器の様相を、S字甕・樽式及び樽式系甕・吉ヶ谷式系甕を軸に伺い、【作業1・2】によって導き出された編年の位置が、群馬県における存在動向に矛盾なく理解できるかを検証した。

これらの結果、砂町遺跡の2点の北陸系土器は「本稿時期の2期」「新潟シンポ編年6期」に位置づけることが最も妥当である、という結論を導き出すこととなった。

### キーワード

対象時代 古墳時代前期

対象地域 群馬県

研究対象 古式土師器・北陸系土器

## 1 はじめに

本稿は、群馬県佐波郡玉村町所在・砂町（すなまち）遺跡出土の甕形土器（以下、「形土器」は省略）2点に対し、複眼的検討を加えることにより、その編年の位置付けを行う、研究ノートである。

## 2 動向・目的

### (1) 最近の動向

近年、群馬県では、古墳時代前期研究に新たな光を当てるが如き、動向がある。それは、「前橋南部地域」や「伊勢崎北部地域」など、それまでは当該時期の遺構遺物資料が少なかった地域において、新資料の発見が増加しているということである。土器・水田・水路・周溝墓・粘土採掘坑など、どれをとっても、その存在は気になるところであるが、それらに混じり、北陸系土器<sup>1)</sup>が若干量存在している。

### (2) 調査と研究

群馬県における北陸系土器への注目は、田口一郎氏による元島名將軍塚古墳溝4出土の「能登形甕または千種形甕(田嶋1986: 以下、千種甕)」の抽出・指摘(田口1981)に始まった訳であるが、以来20年が過ぎた。

この間、有馬遺跡(佐藤1990)、町田小沢II遺跡(小池1994)、荒砥上之坊遺跡(小島1995)などの調査報告や、友廣哲也氏(友廣1996)や川村浩司氏(川村1998・1999)・田口氏(田口2000)らによる研究・問題提議がある。

群馬県出土の北陸系土器は、量的には東海系土器を圧倒的に下回ってしまう現状は否めない。しかし、先の三氏らの指摘を踏まえるならば、その存在が大切な意味をもっているとは容易に理解できる。さらに、最近増加中の北陸系土器のありかたを考えあわせるならば、これらをつくり、使った人々の存在には、群馬の古墳時代幕開けに関する重要な歴史性が内在している、ということが推測できる。

### (3) 本稿の目的

そこで、本稿では、今後の研究において、より一層重要な位置を占めるであろう、北陸系土器の新資料を紹介することを第一の目的とする。そして、その編年の位置付けを行うことを第二の目的とする。

なお、執筆の分担については、3(1)(2)を中里、1・2・3(4)(5)・4・5を深澤、3(3)については中里・深澤で協議し、深澤が執筆することとした。

## 3 玉村町・砂町遺跡出土の北陸系土器

### (1) 遺跡の概要(図1・2)

玉村町は、前橋市・高崎市・伊勢崎市・藤岡市等と境を接し、町域北部を利根川が貫流する。前橋台地と称される洪積台地の南端部に位置し、標高は57~72mで北西から南東にかけてなだらかに傾斜する平坦地である。

砂町遺跡は大字上福島に所在し、町の北部公園整備事業にともない約37,000m<sup>2</sup>が発掘された。1998年4月より第1次から第3次までの計画で発掘調査が進められ、1999年10月に終了している。玉村町の土地改良は昭和30年代からはじまり、遺跡の所在する周辺においても昭和48年に実施され、旧地形を留めていない。そのため、覆土が薄いところでは遺構が破壊され、中・近世の面はほとんどが後世の耕作により攪拌されてしまった。

調査した遺構は、古墳時代の水路・用水路、奈良時代の道路遺構(推定東山道)、平安時代のB水田、中世の溝、近世・近代の用水路・水田、弥生時代~昭和初期までの河川である。古墳時代の水路は4世紀初め頃で、上層をAs-C混入土で覆われている。この水路は地形の高低差により、北西から南東にかけて数条が走り、それらの溝同士を直交して繋ぐ小溝が設けられている。溝の規模は、幅0.5~1.0m、最大で5m、深さ0.4~0.6m程で、断面形状はゆるいU字状・漏斗状のものが多く、底面はほぼフラットで北西から南東にかけて緩やかに傾斜している。底面近くに砂が堆積する箇所があり、水が流れていた形跡も認められる。また堰状の遺構(杭列)が存在することなどから、水田に伴う水路の可能性が高い。4世紀後半の用水路は、幅5~7m、深さ1.2mと規模が大きく、蛇行しながら北西から南東にかけて延びている。蛇行するカーブ部分に杭列があり、水の流れをうまく利用した配水構造となっている。

道路遺構は、東西方向に直線的に延びる2条の側溝として確認された。東端は、河川跡の影響で不明瞭となり、

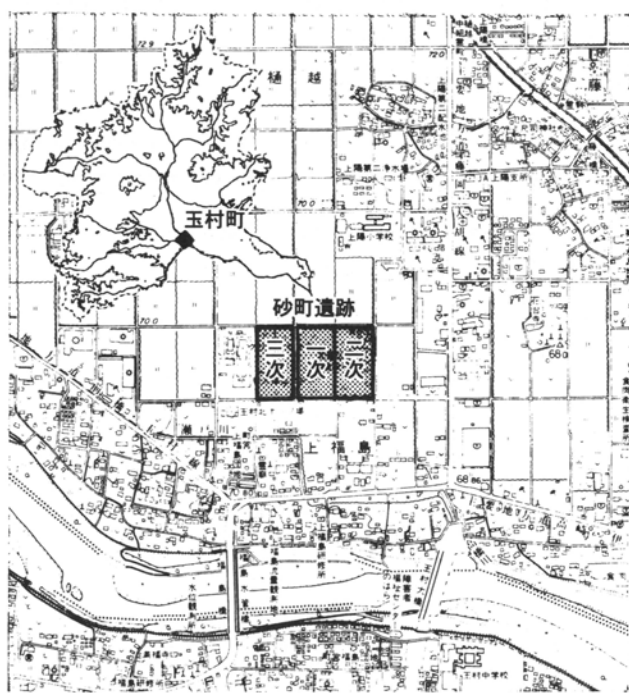


図1 砂町遺跡位置図 (S = 1/20,000)

西端については、近世の用水路により破壊されていたが、部分的に遺存し、これまでの調査で約240mの範囲を確認している。走行方向はN-101°-Eで、規模は側溝間心々距離で、9～10m、側溝は上幅が広く底が浅い皿状を呈している。時期は出土遺物から7世紀後半から8世紀後半頃とされ、古代東山道と考えられている。

平安時代のB水田はほぼ全面で調査されたが、遺存状態が悪く畦畔については部分的な確認となった。このような中でも、旧河川や湿地帯、古い時代の遺構（4世紀後半の用水路など）があったところはAs-Bが良好に堆積し、畦畔および水田が確認された。しかしながら、旧地形の影響を受けているため計画的な地割りができず、その土地の状況に応じた整備をおこなった形態をとっている。ただし、条里にともなう大畦畔に関しては、旧地形の影響を受けず、8世紀後半まで遡る大畦畔も確認している（中里2000）。

おもな遺構は上述した内容となるが、北陸系土器は第2次調査の35溝と絡む倒木痕の一角から出土している。

## (2) 出土遺構とその状況（図3・写真1）

〔遺構名〕倒木痕利用の土坑状遺構

〔位置〕砂町遺跡第2次調査（35溝と重複）

〔形状〕三日月状を呈している（倒木痕は楕円形）

〔覆土〕As-Cを多く含む濃灰褐色土と黒褐色の粘質土

〔出土遺物〕ほぼ完形となる北陸系土器（甕）2点のみ

〔出土状況〕土器は重なりあうよう出土している

〔重複〕35溝を切り、大畦畔（8世紀後半）が上層に重なる

〔時期〕溝に堆積するAs-C混入土や土坑状遺構内のAs-Cを多く含む灰褐色土から、As-C降下後の、より降下

に近い時期と考えられる

〔特徴〕倒木した空間を2次利用した遺構

〔所見〕古墳時代の溝は、調査区全面で確認され、計画的に敷設された水田耕作にともなう水路の可能性が高い。溝の時期は、上層にAs-C混入層があり、間層にAs-Cを混入しない黒色粘質土を挟み、最下層で部分的に砂層が確認できることから、ある程度埋没した段階でAs-Cが降下したと考えられる。As-Cの純層はなく、比較的密度の高いAs-Cが上層に堆積していた。溝には掘り返しなどの痕跡は無く、遺物も出土していないことから存続期間は短い。以上のことから、As-C降下前に掘削された溝であり、より降下に近い時期と考えられる。一方、倒木痕利用の土坑状遺構の覆土は、As-Cが土器出土レベルで密度が非常に高く7・8割は軽石であった。上層は溝の覆土と同程度の混入量（5・6割）となる。土坑の形状は三日月状を呈し、木が東方向に倒れ、根が盛り上がった空間を利用したと推測できる。土器出土面より下層では、黒色腐食土や木の根が確認された。このような状況から、倒木直後にAs-Cが下層に2次堆積したと考えられる。

土器の出土状況は、2個体とも体部の片面が細かく割れていることから、衝撃を受けて破損したことを示す。つまり、設置され土圧などの力により割れたのではなく、何らかの人的作用が働き、破損したということが考えられる。周囲にこの時代の集落は確認されておらず、調査面積37,000㎡からこの2個体のみが出土したのは、遺物・遺構の性格を考える上で重要なポイントである。倒木痕を利用した土坑なのか、あるいは樹木祭祀の一種なのか、今後の課題としたい。

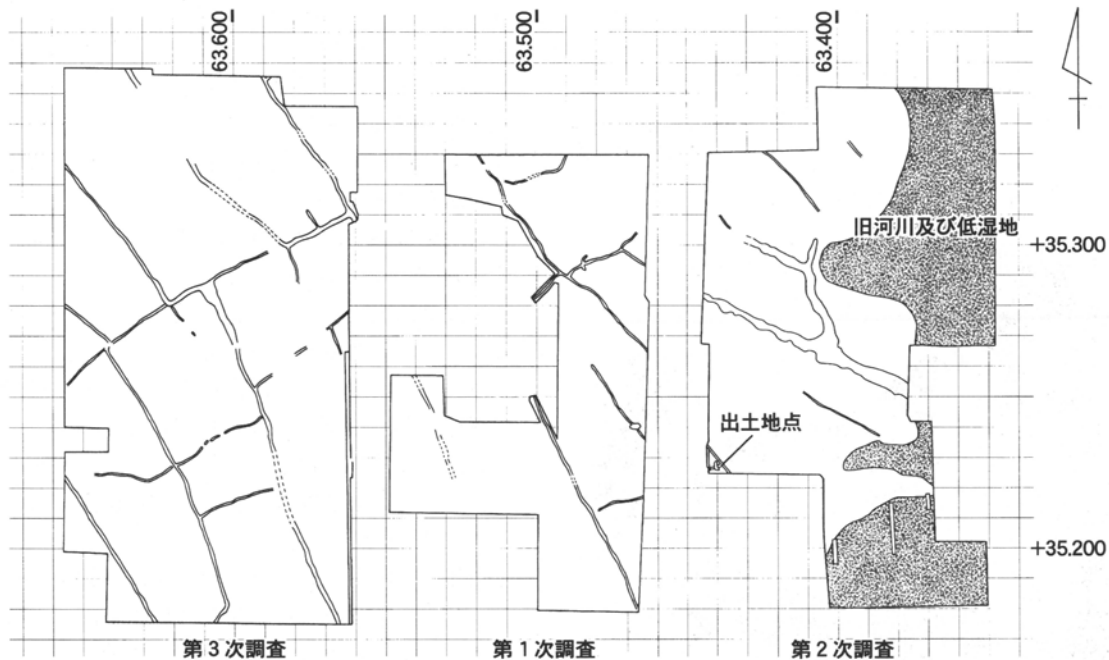


図2 甕1・2の出土地点（S = 1/2,500）

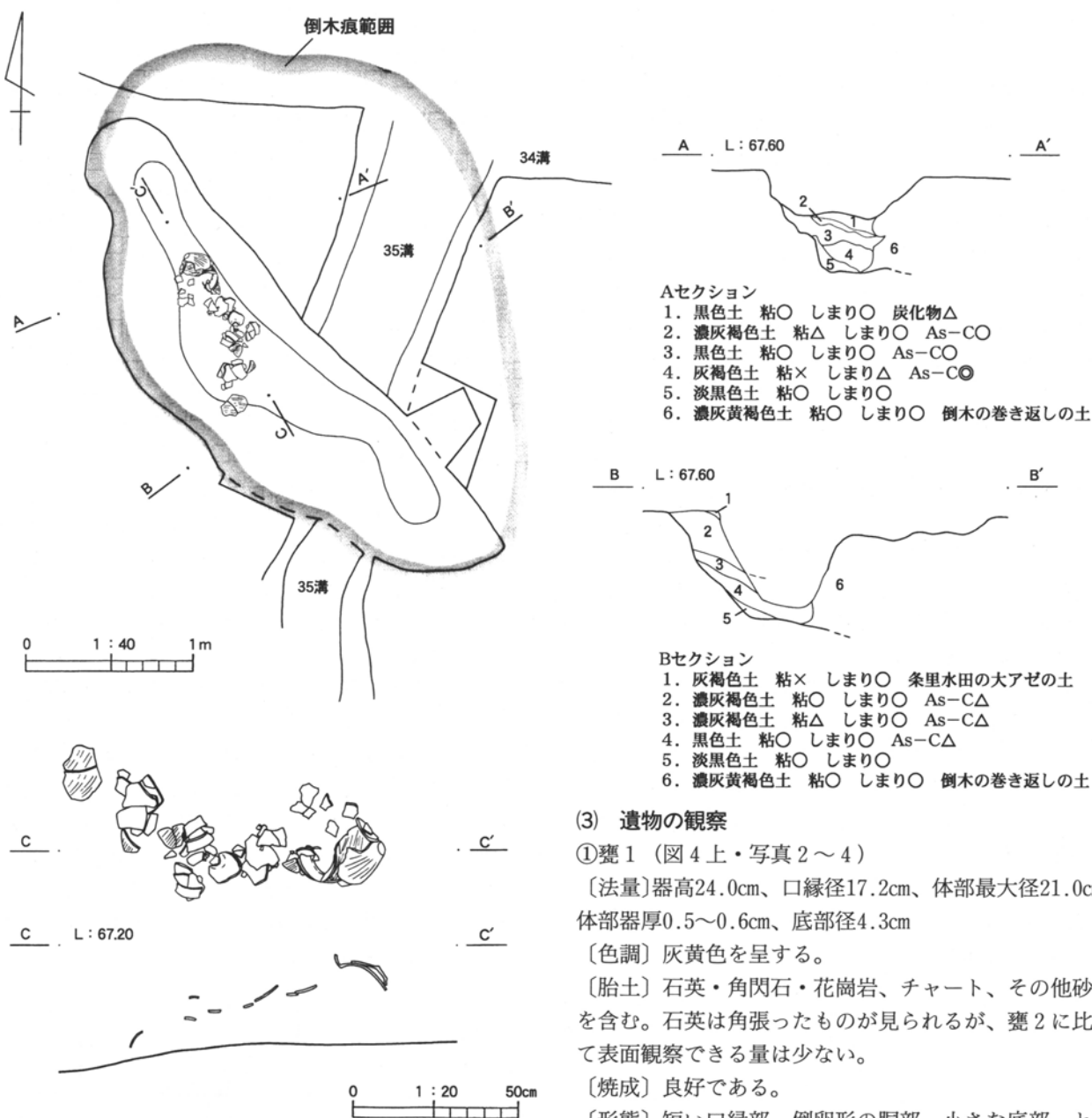


図3 甕1・2出土状況図



写真1 甕1・2出土状況 (NE→)

### (3) 遺物の観察

#### ①甕1 (図4上・写真2～4)

〔法量〕器高24.0cm、口縁径17.2cm、体部最大径21.0cm、体部器厚0.5～0.6cm、底部径4.3cm

〔色調〕灰黄色を呈する。

〔胎土〕石英・角閃石・花崗岩、チャート、その他砂礫を含む。石英は角張ったものが見られるが、甕2に比べて表面観察できる量は少ない。

〔焼成〕良好である。

〔形態〕短い口縁部、倒卵形の胴部、小さな底部、という特徴をもつ。

口縁部は短く、やや外反気味に開く。端部外面には幅7mmの均一な面が一周する。

頸部は断面「く」の字状を呈しているが、シャープさに欠けており、やや丸みをもつ。

体部は中位やや上に最大径をもつ、倒卵形である。

底部は明確な平底をつくり出している。

〔成整形技法〕口縁部は内外面ともヨコナデを施しており、さらに外面端部はつまみ上げるようにして面を丁寧につくり出している。

頸部は外面においてはタテハケ後、粘土を貼り付け、そしてヨコナデを丁寧に施している。内面においてはユビナデが施されており、屈曲部のやや下位に口縁部粘土の輪積み痕跡が段状に残っている。



体部は、外面においては底部→口縁方向のハケ(4~5条/cm)を、下半はタテ方向、上半は左ナメ上方向に、短いストロークで丁寧に施している。なお、成形のためのヘラケズリについては、その存否は観察できなかった。内面においては同じくハケおよびヘラナデを施している。

底部は、ナデによって整形されており、ケズリは施されていない。

## ②甕2 (図4下・写真5~7)

〔法量〕器高22.8cm、口縁径19.0cm、体部最大径22.0cm、体部器厚0.3~0.4cm、底部径3.5cm

〔色調〕淡い黄橙色を呈する。

〔胎土〕石英・角閃石・花崗岩・チャート・その他砂礫を含む。特に石英は多く、長さ3mm程度の角張ったものが多く含まれていることが特徴である。

〔焼成〕良好である。

〔形態〕短い口縁部、縦詰まり気味の倒卵形の胴部、小さい底部、という特徴をもつ。器壁が薄いこともあり、極めて軽量である。

口縁部は短くやや外反気味に開く。端部外面には幅4mmの均一な面が一周する。

頸部は「く」の字状で、比較的シャープな屈曲を持つ。

体部は中位のやや上に最大径をもつ縦詰まり気味の倒卵形である。

底部は尖底状平底であり、やや上げ底状になっている。

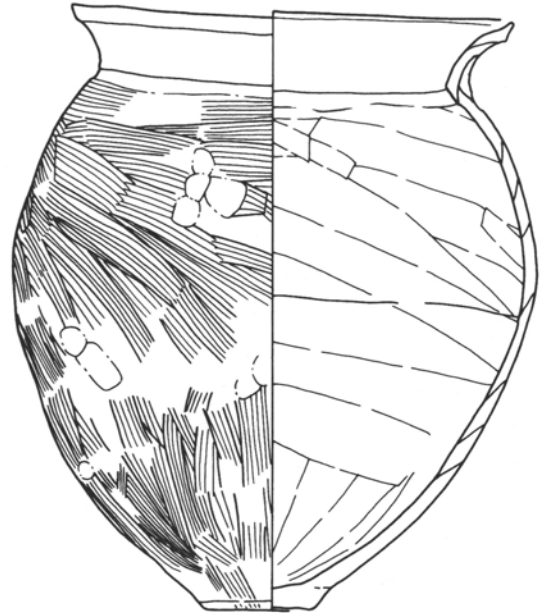
〔成整形技法〕口縁部は、内外面ともヨコナデを施し、さらに外面端部においては、つまみ上げるようにして面を丁寧に作り出している。

頸部は、外面においてはヨコナデ後、斜横位の小刻みなハケを施している。屈曲部には工具小口部の痕跡が残る。内面においてはヘラ(またはユビ)ナデが施されており、屈曲部のやや下位に口縁部粘土帯の輪積み痕跡が段状に残っている。

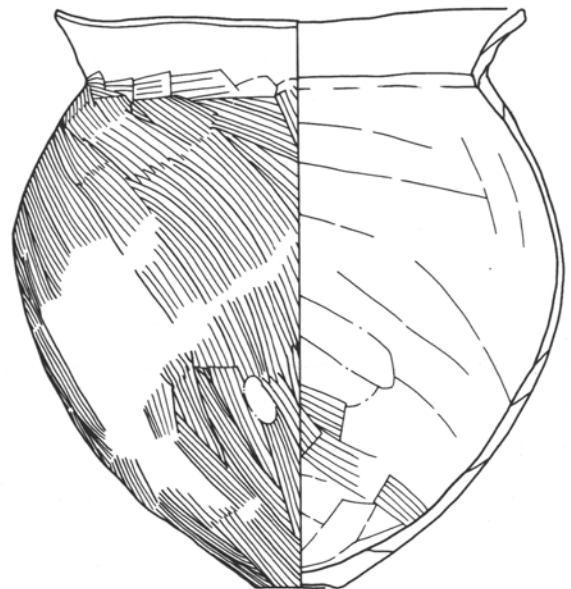
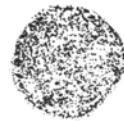
体部は、外面においてはヘラケズリを施した後、底部→口縁方向のハケ(4条/cm)を全面にわたって丁寧に施している。内面においては、同じくハケおよびヘラナデを施して

いる。また、内面においては、中位に僅かな段差が認められ、この部分で成形のタイムラグがあったことが推測できる。

極めて小ぶりの底部は、ケズリによって上げ底気味につくられている。



甕1



甕2



図4 甕1(上)・甕2(下) 実測図(S=1/3)

#### (4) 北陸系土器とした根拠

甕1・2は、形態や技法を詳細に観察した結果、北陸地方の在地甕のひとつである、「千種甕」の範疇で理解できる。

そのように考えた根拠は<sup>2)</sup>、以下の通りである。

〔形態〕

- ①口縁部は短く、やや外反気味に開き、その端部に明瞭な面が存在すること。
- ②口縁部径が胴部最大径に匹敵するくらい大きいのにに対し、底部径は非常に小さいこと。
- ③体部が倒卵形を呈していること。

〔技法〕

- ④外面整形において、口縁部にはヨコナデ・体部には斜ハケが施された後に、頸部に丁寧なヨコナデ(甕1)や断続的なヨコハケ(甕2)が施されること(写真3・6)。
- ⑤内面成整形において、ハケを用いていること。
- ⑥内面において、体部中位に疑口縁状の段差が確認でき、成形時のタイムラグを想定できること。
- ⑦頸部内面において、屈曲部のやや下に、口縁貼り付け粘土帯の輪積み痕跡が残ること(写真4・7)。
- ⑧体部の器壁が薄く仕上げられていること(甕2)。

#### (5) 製作地の推測

甕1・2が「千種甕」の特徴を具備していることが確認できたわけだが、次に、これらが北陸からの搬入品なのか？、群馬での在地品なのか？ということが気になる。

まず、形態的にはやや群馬在地色があるように見えなくてもないが、基本的には「千種甕」のデザインと踏襲しているといえる。また、技法的には北陸の甕製作技法に多くの共通性が見いだせる。

次に、胎土に関してだが、色調的には、こうした灰白色系に焼き上がる胎土は玉村地域では異質な存在であり、出所の違いを臭わせる<sup>3)</sup>。胎土の混入物的には、大粒の石英が多いことが、やや異質である。この2つの異質性から、甕1・2が砂町遺跡周辺での在地品でない可能性も考えられる。

形態・技法における北陸地域の甕との共通性と、胎土における砂町遺跡周辺での異質性を考えあわせると、甕1・2は、もしかすると搬入品であるかもしれない。但し、北陸各地での比較検討を行っていない現状では、搬入品の可能性が高いと、力説する勇気はない。よって、製作地の問題については、①北陸からの搬入品(若狭分類「北陸レベル0」(若狭1998))または②群馬在地品としても忠実模倣品(若狭分類「レベル1」)というように幅を持たせることが妥当である。

そして、本稿においては、①②の2つの可能性があることを前提に論を進めていく。

#### 4 編年的位置づけ

##### (1) 作業の手法

甕1・2には共伴遺物がない。それ故に、「共伴する在地土器の編年観と横並び」をさせることができない。そこで、本稿では甕1・2の編年的位置づけを行うために、次の3つの作業を経ることとする。

【作業1】北陸各地の編年研究において、「千種甕」がどのように型式変化し、その変化時期はいつなのか？ということを概観する。そして、その内容を甕1・2の形態・技法的特徴と比較し、「甕1・2は、北陸各地の編年観においてはどの時期に位置づけられるのか？」という点を類推する。

【作業2】砂町遺跡の所在する前橋南部地域での在地編年を軸に、同地域における北陸系土器のあり方を確認する。そして、その存在性と甕1・2の持つ諸属性とを照らしあわせることにより、甕1・2の、在地における編年的位置づけを試みる。

【作業3】群馬県各地域での北陸系土器の編年的位置及び動向を確認する。そして、【作業1・2】で導かれた甕1・2の位置が、県内の北陸系土器の動向に合致するか？、矛盾はないのか？を検討し、甕1・2の存在性、さらにはその蓋然性についても考える。

そして、上記3つの作業によって得られたことを本稿の結論とする。

##### (2) 【作業1】北陸編年との対比(表1)

「千種甕」は北陸地方に広く分布する甕であり、その存在期間は「日本考古学協会新潟大会シンポ編年」(日本考古学協会新潟大会実行委員会1993:以下、シンポ編年)での3期(それ以前)から9・10期までにおよび、所謂「古墳時代前期」を通じて存在することが明らかになっている。但し、その存在ボリュームは地域によって大きく異なり、各地域の実態に関しては多くの先行研究がある(吉岡1967・1991、谷内尾1983、田嶋1986・1988、小田木1991、坂井・川村1993、栃木1994、春日1994・1998、高橋1995、川村1993・2000など多数)。

こうした諸研究は、勿論のこと、方法論・編年観において、全てが同調するものではなく、対峙点も多々ある。しかし、これらを比較検討した結果、型式変化のあり方については概ね同一の方向性があることが確認でき、変化の時期についても大きな時間幅の中では纏められるという結果が導けたので、その内容について以下に示す。

##### ①形態について

〔口縁部〕端部の変化が顕著である。「A)端部外面を面取りするもの→B)端部を丸く仕上げるもの」という存在主体の変化がある。さらにA)については、面取り幅が「a)広いもの→b)狭いもの」、つまみあげが「α)有る→β)無い」という、変化の傾向がある。

春日真実氏は、一之口遺跡東地区において、A・α)→



写真2 甕1 全体



写真5 甕2 全体

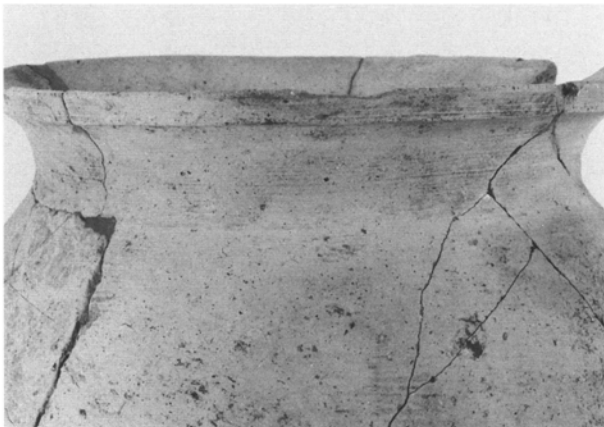


写真3 甕1 口縁～肩部外面



写真6 甕2 口縁～肩部外面



写真4 甕1 頸部内面



写真7 甕口頸部内面

A・β)→B)の変化時期を「一之口Ⅰ期→一之口Ⅱ期→一之口Ⅲ期」とした(春日1994)。さらに同氏は、緒立遺跡における、存在主体の変化としてのA)→B)という変化時期を「緒立1期→緒立2期」とし、a)→b)の変化時期についても「緒立1期→緒立2期」とした(春日1998)。

川村浩司氏は関川流域の編年分析を行う中で、存在主体の変化について、A・α)→A・β)およびB)の変化時期を「2段階→3段階」としている(川村2000)。

高橋浩二氏は北陸全域の分析を行う中で、存在主体の変化について「A)→B)」の変化時期を「Ⅰb式・Ⅱa式→Ⅱb式」としている(高橋1995)。

〔体部〕「A)倒卵形→B)球胴形」という、プロポーシヨンの変化がある。

川村氏は関川流域の変化について、B)への変化の現れを「3段階」としている(川村2000)。

高橋氏は北陸全域を扱う中で、「A)→B)への変化開始→B)」の変化時期を「Ⅰa式→Ⅰb式→Ⅱb式」としている(高橋1995)

〔底部〕「A)明瞭な平底→B)極小の尖底状平底→C)丸底」という変化が想定されている。

高橋氏は北陸全域を扱う中で、「A)→B)→C)」の存在主体の変化時期を「Ⅰa式→Ⅰb式→Ⅱb式」としている(高橋1995)。

春日氏は緒立遺跡の分析において「A)→B)」の存在主体の変化時期を「緒立1期→緒立2期」としている(春日1998)。

②調整について

〔外面調整〕体部のケズリ調整が「A)ある・B)ない」という差異が抽出されている。

田嶋明人氏は、漆町遺跡の分析において、「A)」の存在時期を「漆町5群～7群」とした(田嶋1986)。

川村氏は、関川流域の資料を扱う中で「A)」の存在時期「4段階以降」とし、新しい属性と考え、上野からの影響ということも示唆した(川村2000)。

〔内面調整〕「A)ケズリ調整→B)ハケ調整」という変化が想定される。

高橋氏は、「A)→B)」という存在主体の変化時期を「Ⅰa式→Ⅰb・Ⅱa式」としている(高橋1995)。

春日氏は、緒立遺跡の分析の中で「A)→B)」の存在主体の変化時期を「緒立1期→緒立2期」としている(春日1998)

小田木治太郎氏は、北陸東北部資料の分析の中でケズリ調整の「a)多用→b)少用」の変化を示し、その変化時期を「様相1→様相2」としている(小田木1991)。

以上、技法・調整の属性別の型式変化とその時期についてまとめてみたが、これらの変化は漸移的なものである。よって、厳密には区分することが難しく、あくまで存在主体の変化というように考えている。

③「有段口縁甕」との関係について

ところで、「千種甕」とともに北陸地方の在在甕として「有段口縁甕(以下、月影甕)」がある。この2つの甕は「千種甕」が北陸北東部、「月影甕」が北陸南東部に、それぞれ分布の核を持っているとされるが、双方の分布圏は重複している。そしてこの両者の関係については、北陸南西部を中心に「月影甕」が盛行する地域においても「月影甕→千種甕」という存在主体の変化が生じていることがわかっている。この変化の時期については、田嶋氏は「漆町5～7群」(田嶋1986)、小田木氏は「様相2～様相3」(小田木1991)、高橋氏は「Ⅰb式～Ⅱa式」(高橋1995)、春日氏は「緒立2期～緒立3期」(春日1998)と想定している。

※

以上、北陸における「千種甕」の型式変化およびその時期を、先行研究を参考にまとめてみた。そして、この【作業1】の結果に基づき、砂町遺跡甕1・2の位置付けを考えると次のように考えられる。

1) 甕1・2の新旧要素

甕1・2の型式学的新旧関係については、「甕1(古)→甕2(新)」という流れが考えられる。

その根拠としては、次のことがあげられる。

- ・口縁面取り幅が「広い」(甕1)→「狭い」(甕2)
  - ・底部が「平底」(甕1)→「尖底状平底」(甕2)
  - ・外面ケズリ成形が「ない(?)」(甕1)→「ある」(甕2)
- 但し、これはあくまで型式学的前後関係をしめしたものであり、同時存在していることに矛盾はない。

2) 【作業1】から導かれる甕1・2の時間幅

甕1・2のもつ属性を北陸編年の中でうかがうと、編年の時期に関してはシンボ編年5期～8期という時期幅の中で考えることができる。さらに、属性の存在ボリュームが大きくなる時期を絞り込むならば、甕1・2は、シンボ編年6・7期の範疇で捉えることが妥当である。

3) 甕1・2の故地について

「千種甕」ということで、甕1・2(或いはその製作技術)の故地は北陸北東部にある可能性が高いことには違いない。だが、北陸南西部でも、シンボ編年6～7期(幅をみて5～8期)の間に、「千種甕」は存在するので、北陸南西部が故地である可能性も残しておきたい。

表1 北陸地域の編年対応表

吉岡	新潟	田嶋	小田木	坂井・川村	春日	春日	高橋	川村	砂町甕1・2
1991	1993	1993	1991	1993	1994	1998	1995	2000	2002
北陸		漆町	越中・後	越後	一之口	緒立	北陸	越後	上野
VI-2	3期	3群					Ⅰa式		
VI-3	4期	4群	様相1	Ⅰ最新					
I-1	5期	5群		Ⅱ-1		1期	Ⅰb式	1段階	
I-2	6期	6群	様相2	Ⅱ-2		2期		2段階	
II-1	7期	7群		Ⅱ-3	Ⅰ期	3期	Ⅱa式	3段階	
II-2	8期	8群	様相3	Ⅲ	Ⅱ期			4段階	
	9期	9群					Ⅱb式	5段階	
	10期	10群	様相4	Ⅳ	Ⅲ期			6段階	

## (2) 【作業2】在地編年による検証

### ①編年の現状

シンが編年4期から9・10期までの群馬県内地域の土器編年は田口一郎氏（田口1981・1987・2000）・若狭徹氏（若狭1990）・友廣哲也氏（友廣1992）・橋本博文氏（橋本1993）らによるものがある。なお、筆者である深澤もその素案を提示している（深澤1998・1999）。

ところで、これらの分析はいずれも「在来土器（樽式土器）が、外来系土器の影響をどのように受容し、様相を変容させていくのか？いかにないか？」という点に軸をおいたものであり、一部に分析手法的再検討の余地を残しつつも、概ね同一の方向性を示していると把握できる。共通項としては「外来系土器の受容状況は県内一様でなく、概ね西・東・北部の地域毎に様相を異にする」ということが挙げられる。もちろん、さらなる小地域毎の差異も指摘されてはいるものの、十分な分析・検討を経た、総括的編年案は未だ提出されていない。

### ②検討の基軸

これらの中で、県内古式土師器の分析上、基軸となる分析は若狭氏による樽式系土器の分析（若狭1990）と田口氏によるS字甕の分析（田口1981・2000、以下田口編年）（図5）であるとする。とりわけ、本稿では田口編年を展開基軸とする立場をとる。その理由として、第一に、砂町遺跡の位置する前橋南部地域は東海西部系の外来系土器の影響を強く受けていた可能性が高く（若狭2000）、S字甕は分析媒体として有効と考えたからである。第二には、本稿での結論が将来的に広域編年の俎上にのせられることができるとするならば、付随するS字甕の位置付けを根拠にすることが、現時点では、最も汎用性をもつ根拠になるだろうと考えたからである。

なお、参考として、筆者らが現状で考える、田口編年の各期における基準資料を示しておく<sup>4)</sup>（表2）。

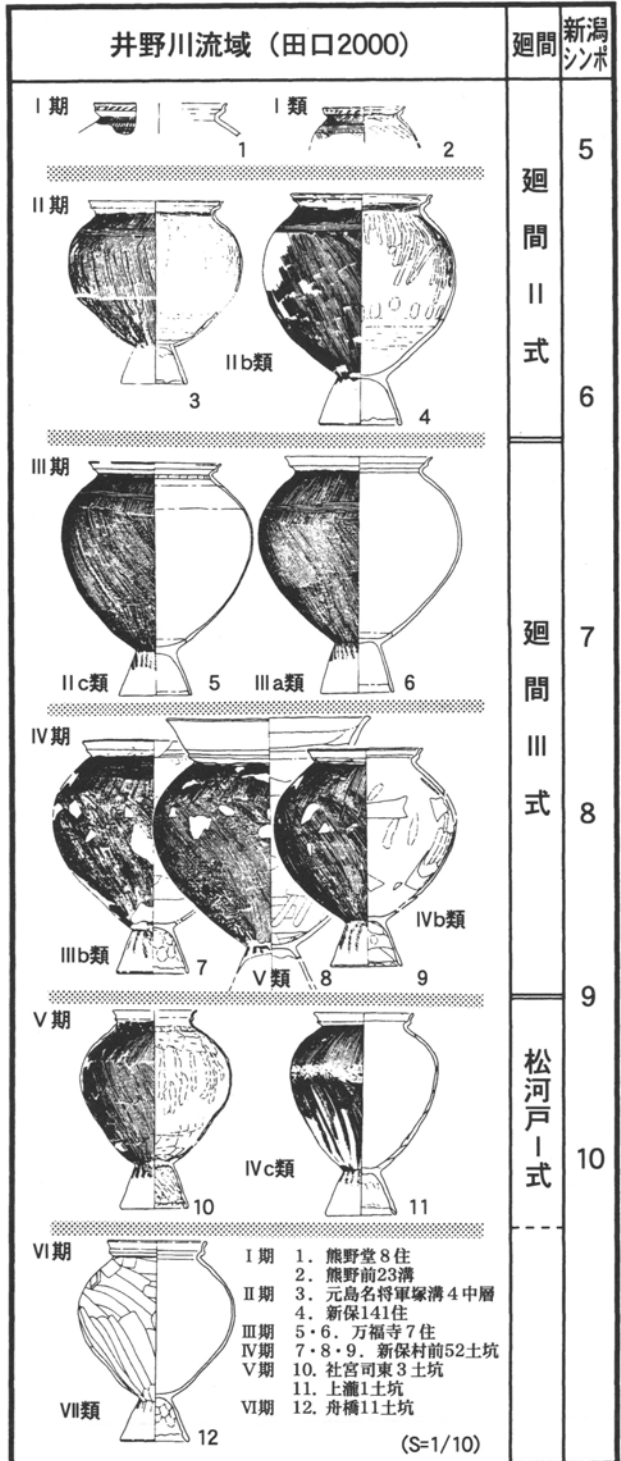
表2 S字甕編年の基準資料

田口2000 S字甕	基準資料	
I期	保渡VII10住	熊野堂III 8住
II期	新保141住	元島名將軍塚溝4中層
III期	元島名將軍塚溝4上層	倉賀野万福寺7住
IV期	下佐野7区45住	倉賀野万福寺4住
V期	上滝1住	鈴ノ宮48住
VI期	舟橋9区11坑	

田口2000「北関東西部におけるS字口縁甕の波及と定着」『第7回東海考古学フォーラムS字甕を考える』

### ③在地での位置付け

前橋南部地域は、前橋八幡山古墳・前橋天神山古墳を域内に含み、古墳時代前期における筆頭的開発拠点と目されているが、それを裏付ける公表データは未だ少ない（図6）。筆者は「少数資料のみからの結論では蓋然性が低い」ことを十分承知している。だがその上で、今後への投げかけという意味もこめ、そして砂町遺跡甕1・2の位置付けのために、当該地域のS字甕変遷案および共存する北陸系土器の状況を伺ってみる（図7）。



I類…口縁部刺突紋が指標（赤塚A類に対応）  
II類…口縁部刺突の喪失、頸部内面ハケメが指標。口縁形態・肩部横線等の属性によりa・b・c類に三細分（赤塚B類古・中に対応）  
III類…頸部から下がった肩部横線、頸部内面ハケメの喪失、胴部外面ハケメ以前のヘラケズリが主な指標。胴部一肩の張る球形から長胴化、口縁端部一面をもつ・沈線化・丸く仕上げる等の属性でa・bに二細分  
IV類…肩部横線の喪失、胴部外面のハケメ以前のヘラケズリが主な指標。胴部一肩の張る球形から長胴化、口縁端部一面を持つ・沈線化・丸く仕上げる。口縁の立ち上がり一外に開く・上部が立ち上がる等の属性によりa・b・c類に三細分  
V類…通常のS字甕口縁部の上部に拡張部が付加される（所謂山陰系甕との折衷）。通常S字甕口縁の3倍の程長い口縁部が多い。  
VI類…V類亜種か、模倣された「S字甕もどき」か。位置付け保留。  
VII類…胴部外面ハケメの喪失。

図5 井野川流域におけるS字甕編年（田口2000を引用・一部加筆）



[I期] 山王若宮II遺跡H-1号住居址(小峯・吉沢2000)  
田口S字甕分類I類甕(以下、「田口〇類甕」と表記)  
(図7-1)に、千種甕が伴う。千種甕(図7-2・3)は  
口縁端部のつまみ上げがシャープであり、県内の千種甕  
の中でも古相を示す。

[II期] 山王若宮II遺跡O-1号落ち込み(小峯・吉沢  
2000)

田口IIb類甕(図7-4)に、千種甕が伴う。千種甕(図  
7-5)は、口縁部が大きく外反し、端部に面を持つ。頸  
部にはハケ調整後のヨコナデが施されており、御当地の  
作法を忠実に踏まえている。さらに、折衷的な甕(図7-  
6)が共伴する。なお、舟渡遺跡C地点出土品(坂井・  
大西1984)は、表採品ゆえに、参考資料の域を超えない  
ものの、土器群の特徴からこの段階に位置すると考えて  
いる。田口IIb類甕(図7-7・8)と千種甕(図7-9  
~11)がある。千種甕は大小サイズすべてが口縁端部を  
明確に面取りするものである。技法的にも御当地の作法  
に忠実である。

[III~IV期] 上之手八王子遺跡BH-116(三浦1991)／山  
王若宮II遺跡H-2号住居址(小峯・吉沢2000)

上之手八王子遺跡BH-116資料は田口IIIa・b類とIV  
b類甕(図7-12~14)が共伴するが、北陸系土器の共伴  
はない。山王若宮II遺跡H-2号住居址資料は田口IIIa・  
IVb・VI類甕(図7-15~18)が共伴するが、北陸系土器  
の共伴はない。なお、本旨には直接関係しないが、この  
H-2号住居址からは布留形甕が出土している。

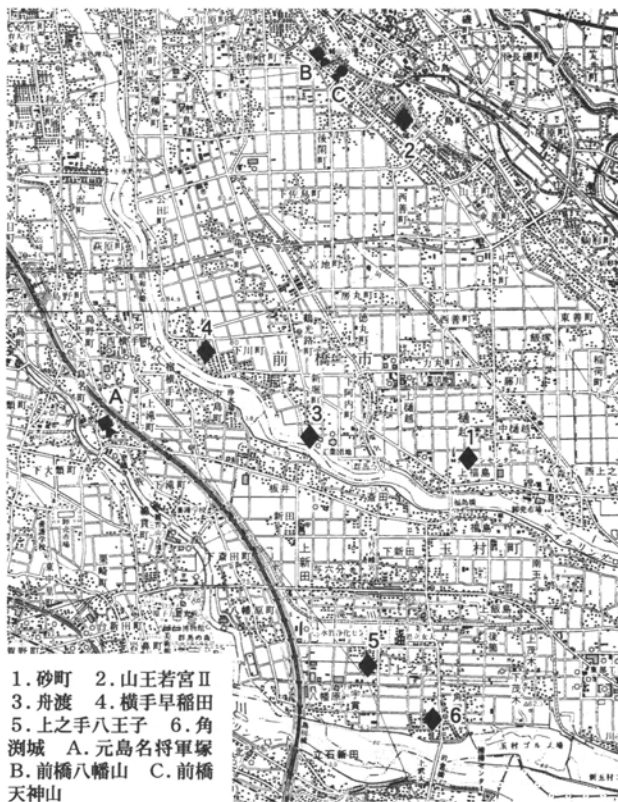


図6 前橋南部(佐波南)地域の本稿関連遺跡(S=1/100,000)

[V期] 横手早稲田遺跡III区4号住居(斉藤2001)

田口IVb?・c類甕(図7-19~21)が出土するが、北  
陸系土器の共伴はない。

[VI期] 角洲城遺跡1号特殊遺構(笠原2001)

田口VII類甕(図7-22・23)が出土するが、北陸系土器  
の共伴はない。

ところで、横手早稲田遺跡と山王若宮遺跡(飯田・佐  
藤1998)ではグリッド出土遺物として有透装飾器台(図  
7-24)が取り上げられている。注目される遺物であるが、  
こうした出土状況ゆえに、共伴土器も特定できず、時期  
を限定することは厳しい。だが、あえて、他のグリッド  
遺物の様相から判断するならば、上記II期からIII期の範  
疇で収められるのではないかと、ひそかに考えている。

### ※

田口編年に基づいて、当該地域での北陸系土器の消長  
をうかがうと、次のことがわかる。

#### 1) 器種について

甕でほぼ占められる。しかも、確認されている甕は全  
て「千種甕」である。客体的な存在として器台もある。

#### 2) 形態・技法等について

形態・技法は御当地・北陸のものに酷似する。胎土分  
析や北陸各地の土器との厳密な検討を経ていない現在に  
おいては、忠実な模倣品(レベル1)と考えておくこと  
が妥当である。ただし、北陸地方からの搬入品(北陸レ  
ベル0)が含まれている可能性も残しておきたい。

#### 3) 帰属時期について

帰属時期は田口編年I~II期に限定される。さらに、  
参考資料としての舟渡遺跡C地点の資料を介在させるこ  
とが許されるならば、とりわけ田口編年II期に集中する  
傾向にあるといえよう。

なお、田口編年III期以降については次の通りである。

III~IV期においては、千種甕の属性の一部が変容した  
ものが<sup>5)</sup>希に存在する程度で、基本的には原姿は失われ  
てしまう。少なくとも、III~IV期に北陸系土器が到来す  
るような、新たな波及現象はないといえよう。

V~VI期においては、全く片鱗さえ伺えなくなる。

#### 4) 【作業2】から導かれる甕1・2の時間幅

甕1・2は、「田口編年を基軸とした、前橋南部地域の  
様相」を見る限りでは、田口編年II期におくことができ  
る。理由としては、第一に、当該地域出土の北陸系土器  
はI・II期に北陸レベル0またはレベル1の土器が集中  
する傾向にあり、甕1・2もこうした傾向の中に位置づ  
けておくことが妥当といえること、第二には、甕1・2  
の型式的特点がI期の土器よりも、II期の土器に類似し  
ていること、が挙げられる。

さらに、広域編年網での位置付けとしては、シンポ編  
年6期併行といえよう。その理由は、田口編年の他地域  
との併行関係(図7)に拠る。





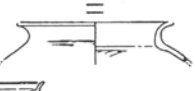





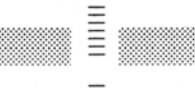
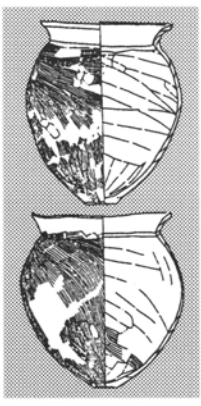

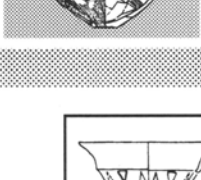





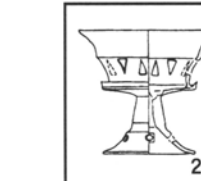









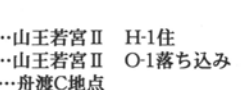

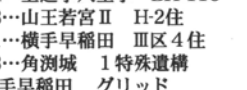
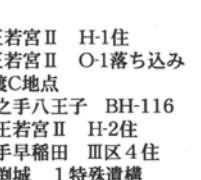
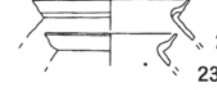


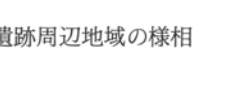
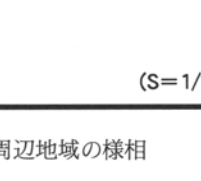
田口 2000	S字甕	千種甕	砂町遺跡甕 1・2	赤塚 1990	田嶋 1993	坂井川村 1993	青木 1996	新潟シンボ 1993
I				廻 間 II 式	漆 町 5・6 群	越 後 I 段 階	北 平 4 期	5 期
II	  	    	  					
III	    		 (参考資料)	廻 間 III 式	漆 町 7・8 群	越 後 II 段 階	北 平 5 期	7 期
IV	  	 						
V	  	 		松 河 戸 I 式	漆 町 9・10 群	越 後 III 段 階	北 平 6 期	9 期
VI	 	 						
			1～3…山王若宮Ⅱ H-1住 4～6…山王若宮Ⅱ O-1落ち込み 7～11…舟渡C地点 12～14…上之手八王子 BH-116 15～18…山王若宮Ⅱ H-2住 19～21…横手早稲田 Ⅲ区4住 22・23…角洲城 1特殊遺構 24…横手早稲田 グリッド			越 後 IV 段 階		10 期
			(S=1/10)					

図7 砂町遺跡周辺地域の様相



(3) 【作業3】周辺地域との比較検討

甕1・2は【作業1・2】において、「シンボ編年6・7期」という位置付けが見通せた。だが、この見通しには、「検討資料が少なく、蓋然性に乏しい」という、欠陥がある。そこで、ここでは、この欠陥を補うために、前橋南部地域以外の群馬県各地域での北陸系土器のあり方について検証し、先に得られた位置づけには存在動向としての蓋然性があるのか？、ないのか？ということについて考えてみたい。

①比較検討の基軸

冒頭にも述べたが、群馬県の弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての土器様相は一様でない。よって、【作業2】で用いた「田口編年」は井野川流域や前橋南部地域では編年分析の基軸となることは確実だが、他地域、特にS字甕が甕形式の主体でない地域において、S字甕卓越地域と同等な扱いをすることは、現状では避けるべきである。そこで、それに代わる基軸としては、①樽式系甕の型式変化（若狭1990）と、②吉ヶ谷式系甕の型式変化（深澤1999）、2つの甕の変化を基軸に用いることと

する<sup>6)</sup>。

樽式系甕の型式変化には、「①樽式3期甕が、外来系の器形と技法を受容していく変化」と、②「樽式3期甕が伝統的器形を保持しつつ、文様が喪失していく変化」とがある。そして、これらの変化は、その末期には「甕ミガキ技法」のみが残存するという様相に転じる（図8）。さらに、この甕の伝統性の残存具合には、地域差があるとするが、全域的にドラスティックな変化がおこる時期としては樽式系Ⅰ～Ⅱ段階が考えられる。

吉ヶ谷式系甕の型式変化は、「①器面外面に施文された縄文が喪失していく変化」と「②頸部の屈曲度が増し、口縁部における輪積み痕の装飾的効果が増加していく変化」とがある。そして、これらの変化は、①→②の順番で生じ、その末期には「口縁部の輪積み装飾」のみが残存するという様相に転じる（図9）。さらに、この甕の変化がおこる時期として、①の変化は吉ヶ谷式系Ⅰ～Ⅱ段階、②の変化は吉ヶ谷式系Ⅲ～Ⅳ段階と考えている<sup>7)</sup>。

なお、「本稿1～5期（以下、本稿略）」と各甕の型式変化に基づく設定段階の併行関係を示しておく（表3）。

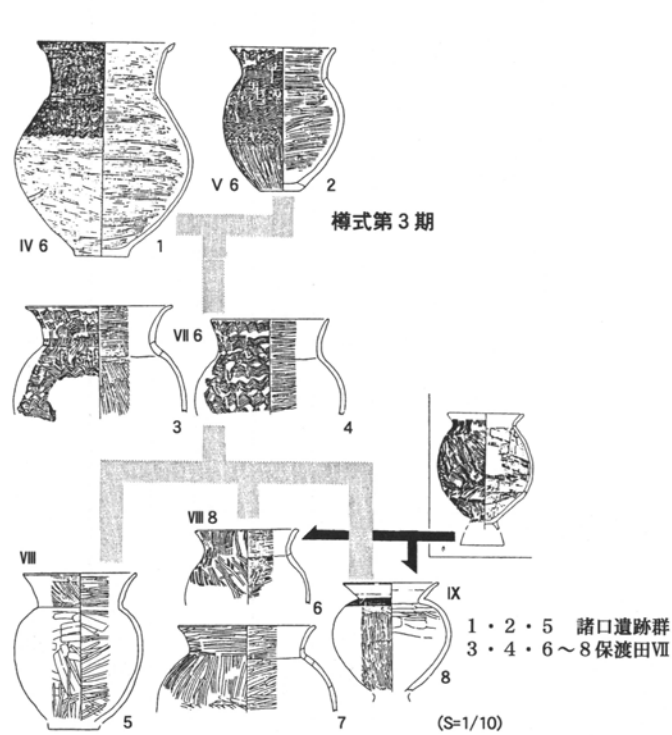


図8（左） 樽式系甕の型式変化（若狭1990）

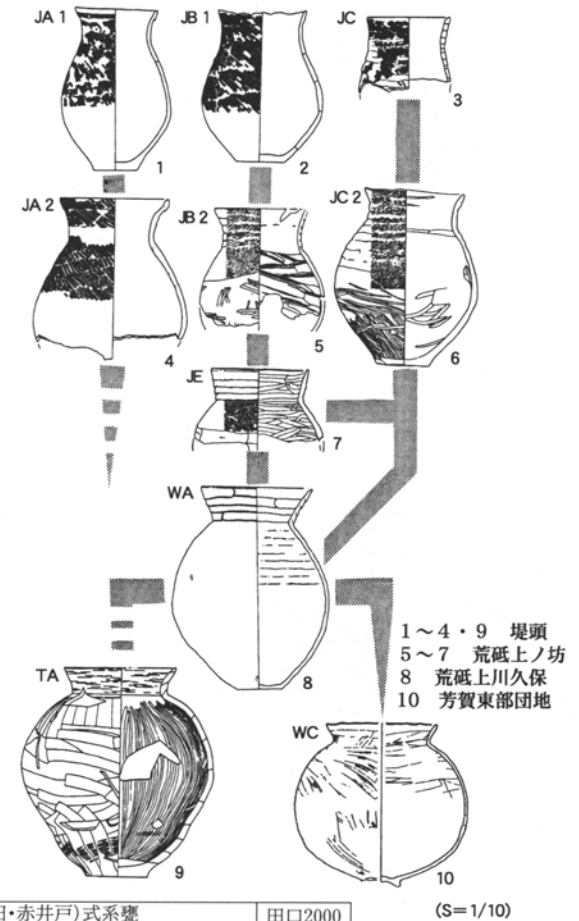


図9（右） 吉ヶ谷（旧・赤井戸）式系甕の型式変化（深澤1999）

表3 本稿時期と基軸編年との対応表

本稿時期	若狭1990	樽式系甕					吉ヶ谷(旧・赤井戸)式系甕						田口2000 S字甕
		IV	VII 6	VIII 8	IX	VIII 7	JA/B	JC	JE	WA	WC	TA	
1期	I段階	○	○	○	○	○	○	○					I期
2期	II段階				○	○	○	○					II期
3期	III段階								○	○			III期
4期										○	○	○	IV期
5期													V期

②地域の区分とその様相

【作業3】での地域区分は、若狭氏による区分（若狭2000）を基準にする（図10）。この区分は、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての「伝統性」「閑散性」と「外来受容性」「新開性」に依拠した区分であり、当該時期の群馬県の土器様相の差異を反映させているものである。よって、これを基準にすることが妥当と考えた。

- 各範囲は次の通りである（若狭2000引用、一部略）。
- (A) 「佐波南地域」 (=前橋南部地域) …利根川低地帯南岸地域。前橋市南部、高崎市東端部、玉村町など。
  - (B) 「利根地域」…利根川上流で、片品川との合流部。沼田市、昭和村、川場村など。
  - (C) 「北群馬地域」…榛名山東麓で利根川と吾妻川の合流部周辺。渋川市、北橋村、赤城村、子持村など。
  - (D) 「勢多地域」…赤城山南麓地域。前橋市北東部、粕川村、新里村、富士見村など。
  - (E) 「群馬地域」…榛名山東南麓の井野川流域を核とした地域。高崎市、群馬町、箕郷町など。
  - (F) 「佐波北地域」…利根川低地帯北岸地域。勢多地域に至近。前橋市東部、伊勢崎市など。
  - (G) 「新田地域」…利根川中流域の北岸。太田市、新田町、尾島町など。
  - (H) 「碓氷地域」…碓氷川流域の高崎市西端部から安中市、松井田町など。
  - (I) 「甘楽地域」…鎗川流域の谷地域。富岡市、甘楽町、吉井町、妙義町など。

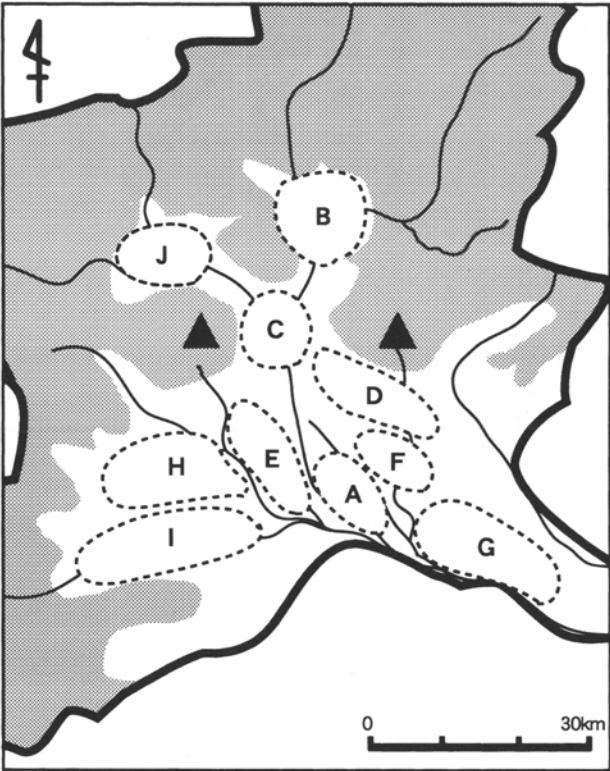


図10 地域区分図（若狭2000を参考に作成）

なお、この他に、(J)吾妻地域がある。本稿のテーマを考える上で、この地域の様相理解が重要なことであることは、筆者は十分承知している。だが、資料検討が不十分なため、本稿ではその理解を保留することとした。

なお、本稿では、川村氏が指摘された北陸系土器（川村1999）を主に取り扱い、その他、最近の資料について

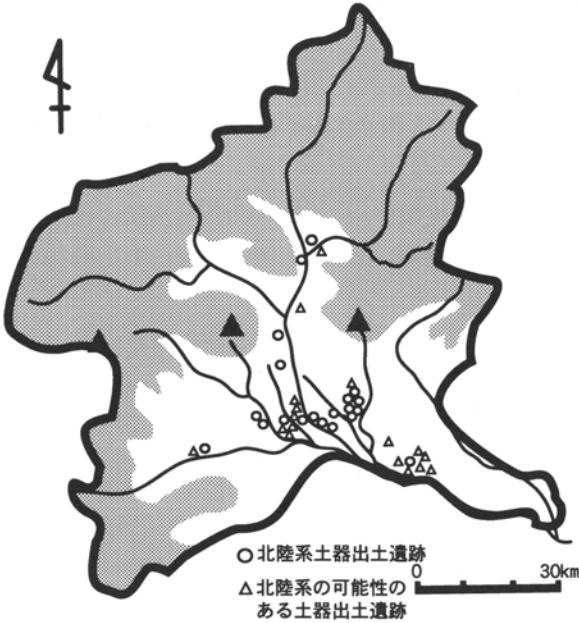


図11 北陸系土器出土遺跡の分布（川村1999を参考に作成）

時期	S字壺	樽式・樽式系壺	吉ヶ谷式系壺	北陸系土器
(樽3)	1・2…町田小沢Ⅱ1住 3…戸神原訪15住 4…高野原グリッド 5…高野原5住 6…戸神原訪36住 7…戸神原訪87住 8…糸井宮前125住			
1・2				
3 5				

図12 (B) 利根地域の様相

は、筆者が確認したものを加えた（図11）。

(B) 利根地域（図12）

本地域は、樽式3期に一定の遺跡ボリュームをもつ<sup>8)</sup>。この樽式の伝統は、「1～2期」にも根強く残るが、その一方で、「3期」以降、吉ヶ谷式系甕の存在が目立つようになる。よって樽式3期から「2期」については樽式及び樽式系甕が時期認定の主軸、「3期」以降については樽式系甕及び吉ヶ谷式系甕が主軸、S字甕が補助軸となる。

北陸系土器は、樽式3期に一器種のみが在地器種組成の中に入り込むが、その後、構成比率を増やすことはなく、属性が姿を消してしまう。一部、「1～2期」まで、属性の名残が見受けられるものもあるが、それは極微量である。「3期」以降は、全く残存していない。

町田小沢Ⅱ遺跡1号住居の甕（図12-2）は搬入品（北陸レベル0）とされる千種甕である<sup>9)</sup>。口縁の面取り、倒卵形の体部、尖底状の小径の底部、胴部上位にある斜行

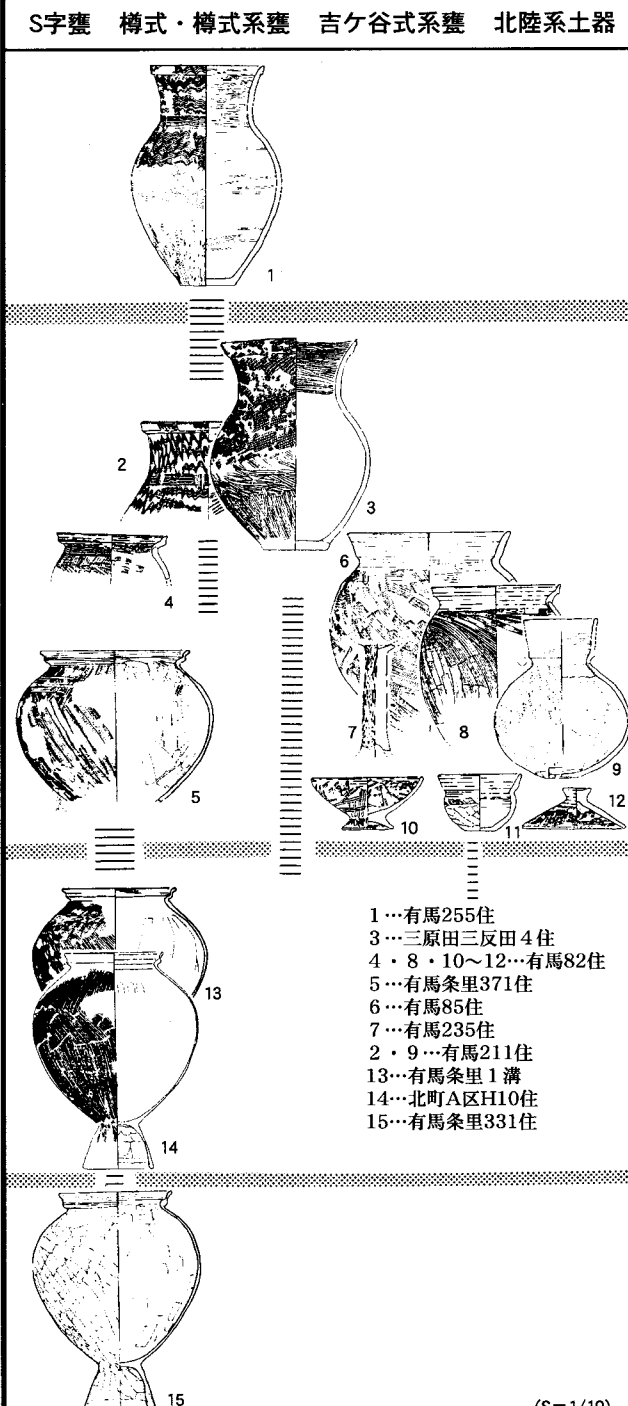
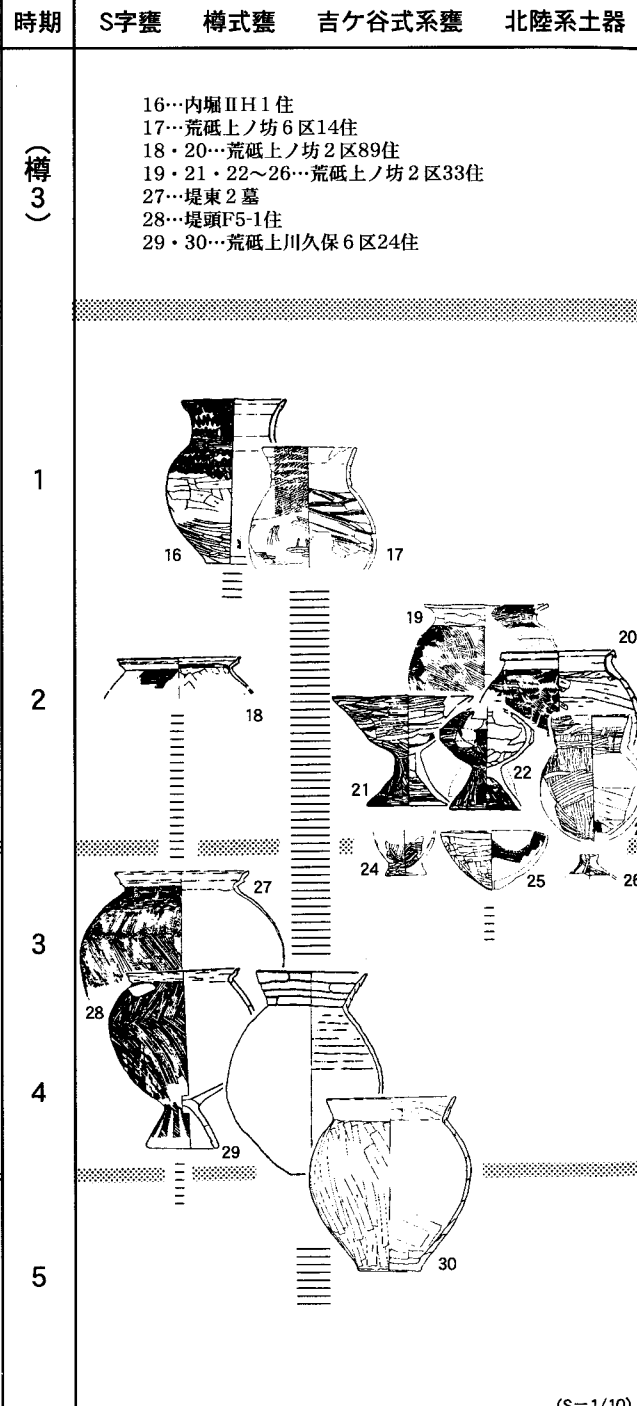
S字甕	樽式・樽式系甕	吉ヶ谷式系甕	北陸系土器	時期	S字甕	樽式甕	吉ヶ谷式系甕	北陸系土器
				(樽3)	<p>16…内堀ⅡH1住 17…荒砥上ノ坊6区14住 18・20…荒砥上ノ坊2区89住 19・21・22~26…荒砥上ノ坊2区33住 27…堤東2墓 28…堤頭F5-1住 29・30…荒砥上川久保6区24住</p> 			
(S=1/10)				1	(S=1/10)			
				2				
				3				
				4				
				5				

図13 (C) 北群馬地域（左）と (D) 勢多地域（右）の様相

研究紀要20正誤表

位 置	正	誤
116頁 図13の右上	樽式甕	樽式系甕

刺突文の存在など、いずれも古相を伺わせる。相伴土器は各器種とも在地の樽式3期土器であり、その中に1点のみ存在することから、樽式3期段階の搬入と考えられる。

#### (C) 北群馬地域 (図13左)

本地域は、樽式3期に一定の遺跡ボリュームをもつ。「1～2期」には樽式系甕が伝統性を維持するものの、S字甕や吉ヶ谷式系甕が加わる。「3期」以降はS字甕が主体となり、樽式系及び吉ヶ谷式系甕は姿を消していく。このことから、樽式3期から「1期」までは樽式及び樽式系甕を、「2期」以降はS字甕 (図13-4) を介在させることにより<sup>10)</sup>、S字甕を時期認定の主軸とする。

北陸系土器は、「1～2期」に複数器種が存在し、在地土器に変わって、主体的に存在する。「3期」には、一部に、属性の名残が見受けられるものもあるが、それは極微量である。4期以降は、残存していない。

有馬遺跡の82号住居の甕・低脚坏・鉢・蓋 (図13-8・10～12)・85号住居の甕 (図13-6)・211号住居の壺 (図13-9)、235号住居の高坏 (図13-7) は、いずれも形態・技法の特徴から北陸系土器といえる。211号住居の樽式系甕 (図13-2)、82号住居の田口I類甕 (図13-4) の相伴と、有馬遺跡の遺跡自体の存続期間を勘案し、これらを「1～2期」と位置づけた。

#### (D) 勢多地域 (図13右)

本地域は、樽式3期併行期には遺跡の分布が極めて希薄な、閑散地域である。点的な生活痕跡はあるだろうが、核となる遺跡は存在しない。ところが、「1～2期」には吉ヶ谷式系甕を筆頭に、樽式系甕・S字甕、他にも単口縁台付甕や十王台・二軒屋式系甕などが他地域の甕が存在する。「3期」以降は吉ヶ谷式系甕が優勢となり、S字甕が客体的存在となる。このことから、吉ヶ谷式系甕を時期認定の主軸とし、S字甕を補助軸とする。

北陸系土器は、「1～2期」に複数器種が存在し、在地土器に変わって主体的に存在したり、単器種で、客体的に存在したり、と存在のあり方にバリエーションがある。「3期」には、属性の名残が見受けられるものもあるが、極微量である。「4期」以降は、残存していない。

荒砥上ノ坊遺跡の2区33号住居の甕・高坏・器台・壺・低脚坏・有孔鉢・蓋 (図13-19・21～26)・2区89号住居の甕 (図13-19) はいずれも形態・技法の特徴から北陸系土器といえる。2区89号住居の田口IIb類甕 (図13-18) の相伴と、荒砥上ノ坊遺跡自体の存続期間を勘案し、これらを「2期」と位置づけた。

#### (E) 群馬地域 (図14)

本地域は、樽式3期に一定のボリュームの遺跡をもつが、「1期」にはS字甕を含む外来系甕が参画し、樽式系甕は急速に変容する。「2期」にはS字甕が主体を占め、樽式系甕は次第に姿を消す。吉ヶ谷式系甕は存在は確認

できるが、極微量である。「3期」以降はS字甕が主体となる。こうした状況から、S字甕を時期認定の主軸とし、「1期」については、樽式系甕を補助軸とする。

北陸系土器は、「1～2期」に複数器種が存在するが、遺跡・遺構単位で北陸系土器が主要器種を占有することではなく、構成器種の中の1～2器種を占めるといった状況である。「3～4期」には、確実な北陸系土器の存在は確認されなくなるが、そのニュアンスをもつ土器は若干存在する。「5期」にはなくなる。

上大類北宅地遺跡1号周溝墓の器台 (図14-6)、形態の特徴から北陸系土器といえる。樽式系甕の出土はない

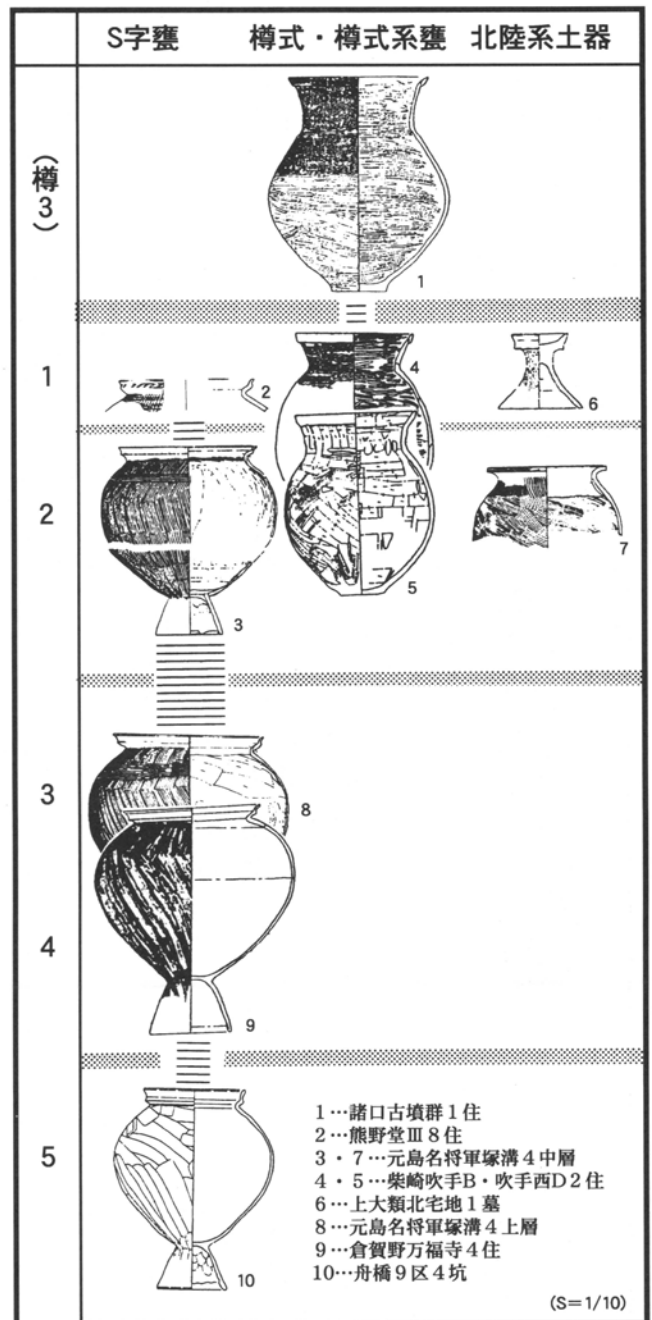


図14 (E) 群馬地域の様相

が、併行する時期の樽式系壺の共伴と、その他出土遺物の様相から、「1期」と位置づけた。元島名将軍塚溝4中層の甕(図14-7)は搬入品(レベル0)とされる千種甕である<sup>11)</sup>。田口II b類甕(図14-3)やその他一括遺物の共伴関係から、「2期」と位置づけた。

#### (F) 佐波北地域(図15左)

本地域は、樽式3期併行期には遺跡の分布が希薄な、閑散地域と考えられる。点的な生活痕跡はあるだろうが、核となる遺跡は存在しない<sup>12)</sup>。「1～2期」には次第に遺跡が増加し始めるが、中核的な遺跡に乏しく、S字甕のほか、多種の甕が散在する。ところが、「3～4期」になると、S字甕が主体となり、吉ヶ谷式系甕・樽式系甕は極めて客体的存在となる。このことから、S字甕を時期認定の主軸とする。

北陸系土器は、「1～2期」に数器種が存在するものの、遺構毎には単器種での存在である。但し、これらの一部には、「3期」に下る可能性をもつものもある点は注意したい。「3期」においては、「2期」のもので時期が下る可能性あるものを除けば、確実な北陸系土器は見あたらない。「4期」以降は、残存していない。

喜多町遺跡の器台(図15-3)、波志江中野面遺跡A区7号方形周溝墓の千種甕(図16-4)については形態・技法の特徴から、三和工業団地I遺跡25号住居の鉢(図15-5)については形態的な特徴から、いずれも北陸系土

器といえる。喜多町遺跡の器台は、出土遺構が不明であるため、限定的な位置付けはできないが、共に出土している田口I類甕(図15-1)の存在や、他の遺物のあり方から「1～2期」に位置づけた。波志江中野面遺跡の千種甕は、共伴遺物が「2～3期」の時間幅をもつ。S字甕では田口III a類甕がある。ところが一方で、他の出土遺物には「2期」のものも含まれており、墓出土という性格も加味し、「2～3期」の範疇で位置づけることとする。三和工業団地I遺跡の鉢は、S字甕の共伴があるが、脚部のみ残存のため、細分類ができない。そこで、他器種の様相を踏まえて、「2～3期」の範疇で位置づけることとする。

#### (G) 新田地域(図15右)

本地域は、樽式3期併行期には遺跡の分布が極めて希薄な、閑散地域である。核となる遺跡は存在しない。「1～2期」にはS字甕のほか、単口縁台付甕など、他地域の甕が混在する。「3～4期」には、S字甕が主体となる。このことから、S字甕を時期認定の主軸とする。

北陸系土器は、「2期」に単器種が存在する。「3期」には、変容した北陸系?土器(レベル2)の事例もあるが、その数は少ない。「4期」以降は、残存していない。

下田中遺跡4号住居の鉢(図15-10)は形態の特徴から北陸系土器といえる。田口II b類甕の共伴から、「2期」に位置づけられる。

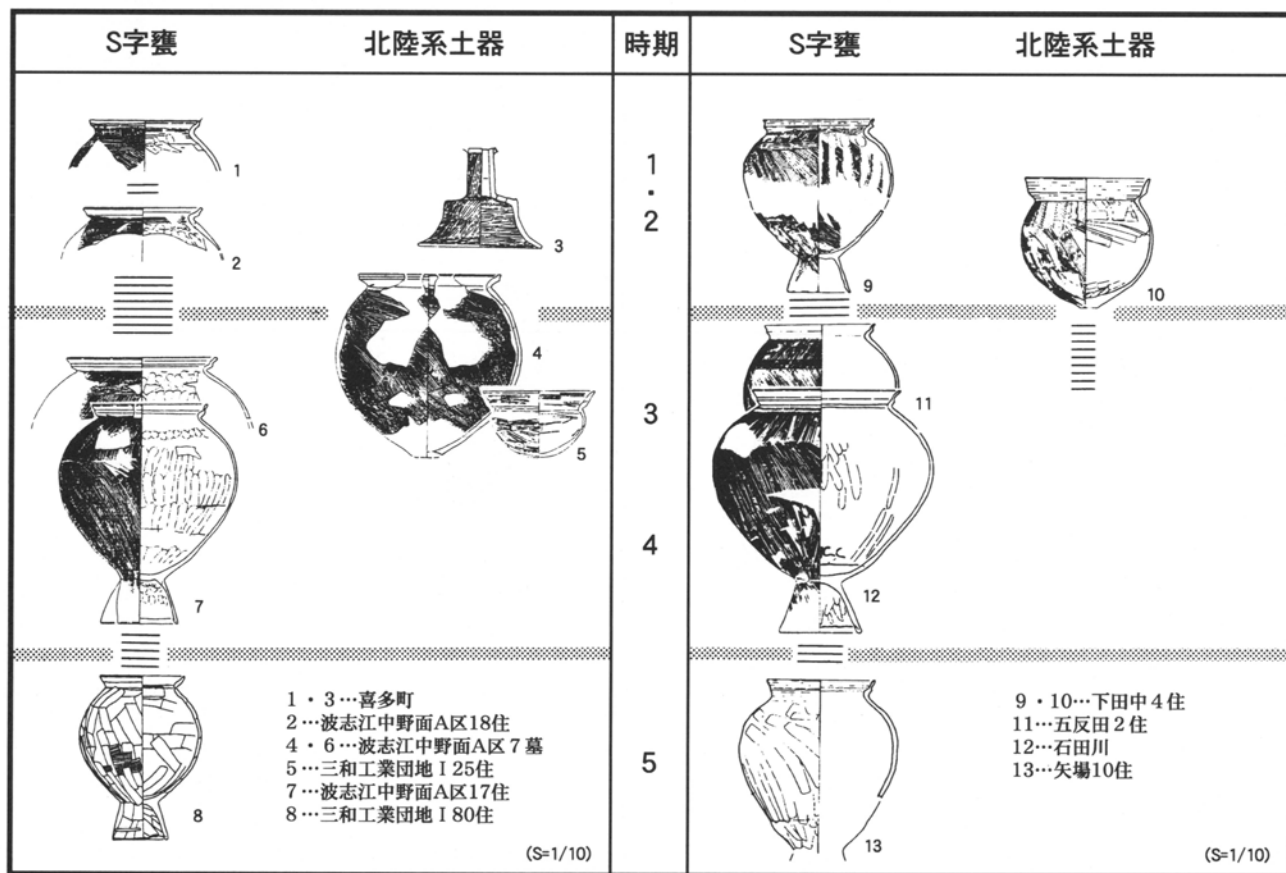


図15 (F) 佐波北地域(左)と(G) 新田地域(右)の様相

(H) 碓氷地域 (図16左)

本地域は、樽式3期に一定の遺跡ボリュームをもち、吉ヶ谷式甕が客体的に存在する。「1～2期」には樽式系甕が伝統性を維持するものの、S字甕や吉ヶ谷式系甕が存在し、「3期」以降はS字甕と吉ヶ谷式系甕が主体となり、樽式系甕は姿を消していく<sup>13)</sup>。このことから、樽式3期から「1期」までは樽式及び樽式系甕を、そして、諏訪ノ木遺跡Y107号住居の相伴関係 (図16-3～5) を介在させることにより、「1期」以降はS字甕と吉ヶ谷式系甕を時期認定の主軸とする。

北陸系土器は、「1～2期」に単器種で存在する場合と、複数器種で存在する場合とがある。「3期」には、属性の名残が見受けられるものもあるが、極微量である。「4期」以降は、残存していない。

八幡遺跡119号住居の鉢 (図16-6) は形態的特徴から北陸系土器といえる。樽式系甕と吉ヶ谷式系甕が相伴することから「1～2期」と位置づけた。豊岡後原遺跡Ⅱ-1号方形周溝墓の甕・鉢・蓋 (図16-7～9) は形態・技法の特徴から北陸系土器といえる。樽式系甕が相伴す

ることと、明らかな「3期」以降の遺物が相伴しないことから「1～2期」と位置づけた。

(I) 甘楽地域 (図16右)

本地域は、樽式3期に一定の遺跡ボリュームをもち、樽式甕と共に吉ヶ谷式甕が高比率で存在する (図16-14・15)。「1～2期」には樽式系甕が伝統性を維持するものの、S字甕や吉ヶ谷式系甕が存在し、「3期」以降はS字甕と吉ヶ谷式系甕が主体となり、樽式系甕は姿を消していく。このことから、樽式3期から「1期」までは樽式及び樽式系甕、「1期」以降は、阿曾岡権現堂遺跡阿曾岡地区65号住居の相伴関係 (図16-16・17) を介在させることで、S字甕と吉ヶ谷式系甕を時期認定の主軸とする。

北陸系土器は、「1～2期」に単器種で存在する場合と、複数器種で存在する場合とがある。「3期」以降は、確認できず、残存しないと思われる。

阿曾岡権現堂遺跡阿曾岡地区11号住居の甕 (図16-18) は形態・技法的特徴から北陸系土器といえる。S字甕・樽式系・吉ヶ谷式系甕の相伴はないが、他器種の位置付けと阿曾岡権現堂遺跡自体の存続期間を勘案し、「2期」

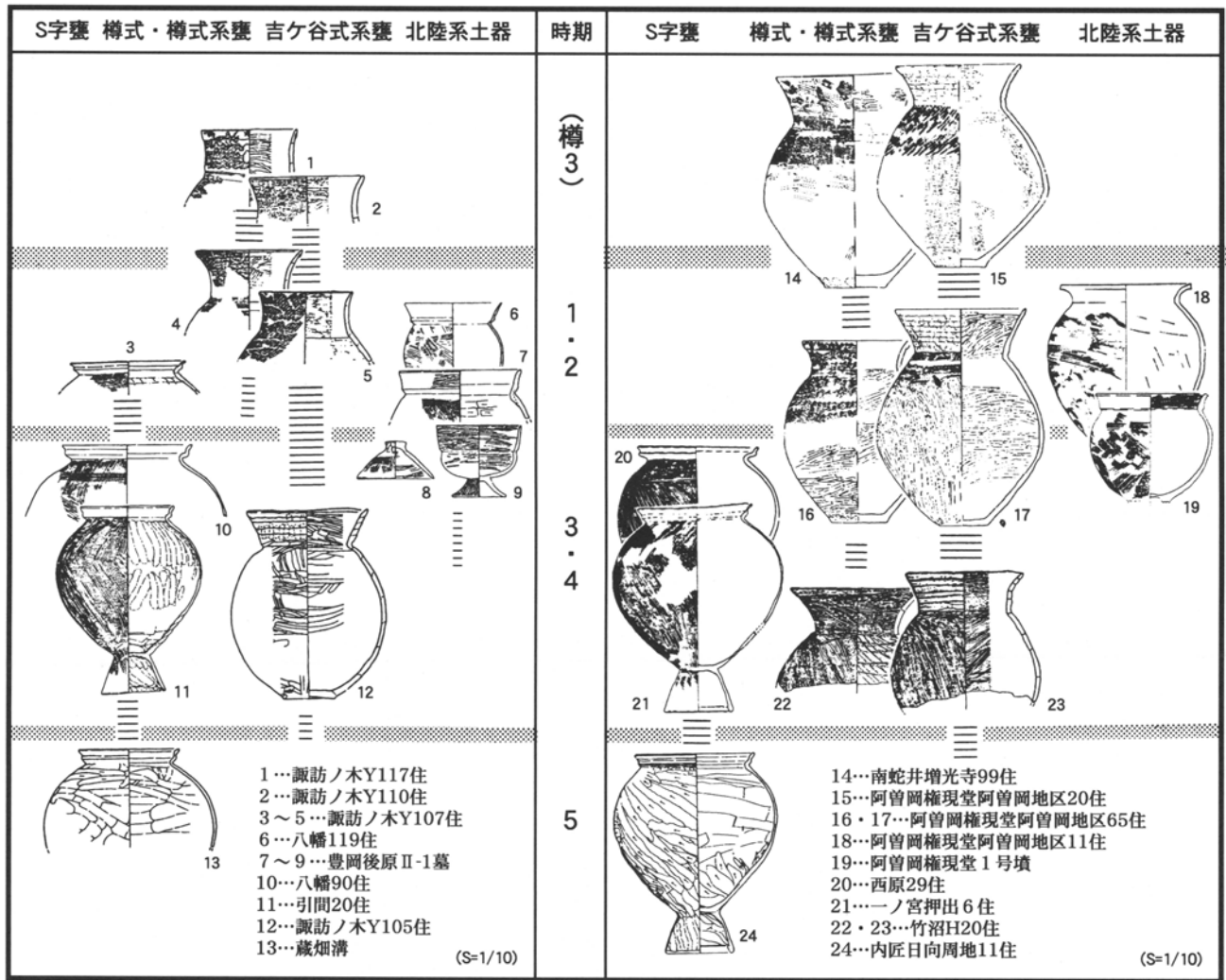


図16 (H) 碓氷地域 (左) と (I) 甘楽地域 (右) の様相



と位置づけた。阿曾岡権現堂遺跡1号墳の甕（図16-19）は形態・技法の特徴から北陸系土器といえる。S字甕の共伴があるが、脚部のみ残存のため、細分類が難しい。そこで、他器種の様相を踏まえ、かつ、墓出土という性格を加味し、「2～3期」の範疇で位置づけることとする。

※

各地域の北陸系土器の様相として次のことがわかる。  
1) 時期について

樽式3期段階に存在する地域として、唯一、利根地域があるが、他の地域では全て「1～2期」、特に「2期」に集中して存在する。「3期」以降は、佐波北地域・新田地域でその存在に少ないボリュームが認められそうだが、他の地域では僅かな変容品を除いて、基本的には残存しなくなる。「3期」以降に初登場する地域はない。

2) 出土遺構について

住居など集落遺構からの出土は群馬地域以外の全ての地域で認められる。墳墓からの出土は、群馬・佐波北・碓氷・甘楽の各地域で認められる。

3) 出土器種について

単器種での存在の場合、甕または鉢が多い。器台もある。複数器種での存在の場合、甕や小型壺、高坏など、中小型の主要器種がそろそろ状況が確認できる。

4) 組成の中でのあり方について

在地土器（樽式土器）組成の中に、単一器種で存在するというあり方は、利根地域で見られる。北陸系土器で主要器種を構成し、その中に在地土器や他の外来系土器を含むというあり方は、北群馬と勢多地域が挙げられる。前者は在地系、後者は他の外来系土器との共伴が顕著である。なお、碓氷地域でも、これに近いあり方をしめす。

在地土器や他の外来系土器で主要器種を構成する中に、1～2器種が点的に存在するというあり方としては、群馬・佐波南・佐波北・新田・碓氷・甘楽地域と勢多地域の一部が挙げられる。なお、利根地域でも変容品が、このあり方をしている可能性もある。

5) 存在型の抽出（図17）

各地域の様相を見ていくと、北陸系土器の存在型は大きな意味で3つの型が存在することがわかる。なお、群馬県内の外来系土器の様相に関する類型化は、すでに田口氏（田口2000）によって指摘されている。

A型…樽式3期に、集落の在地器種構成の中に北陸系土器が甕が単器種で少数参入する型。指標は利根地域（町田小沢II遺跡例）の様相。

B1型…「1・2期」に、集落遺跡・遺構単位で、北陸系土器が主要形式を占有する型。共伴土器に在地色が強いものをB1a型とし、指標は北群馬地域（有馬遺跡例）の様相とする。また、共伴土器に外来色が強いものをB1b型とし、指標は勢多地域の一部（荒砥上之坊遺跡例）の様相とする。

B2型…「1・2期」に、墳墓において北陸系土器が主要形式を占有、または数形式を占有する型。指標は碓氷地域の一部（豊岡後原遺跡例）の様相。

C1型…「1・2期」に、集落の器種構成の中に北陸系土器が1～2器種で少数参入する型。共伴土器に在地色が強いものをC1a型とし、指標は碓氷地域の一部（八幡遺跡例）の様相とする。また、共伴土器に外来色が強いものをC1b型とし、指標は甘楽地域の一部（阿曾岡権現堂遺跡例）の様相とする。

C2型…「1・2期」に、墳墓において、器種構成の中

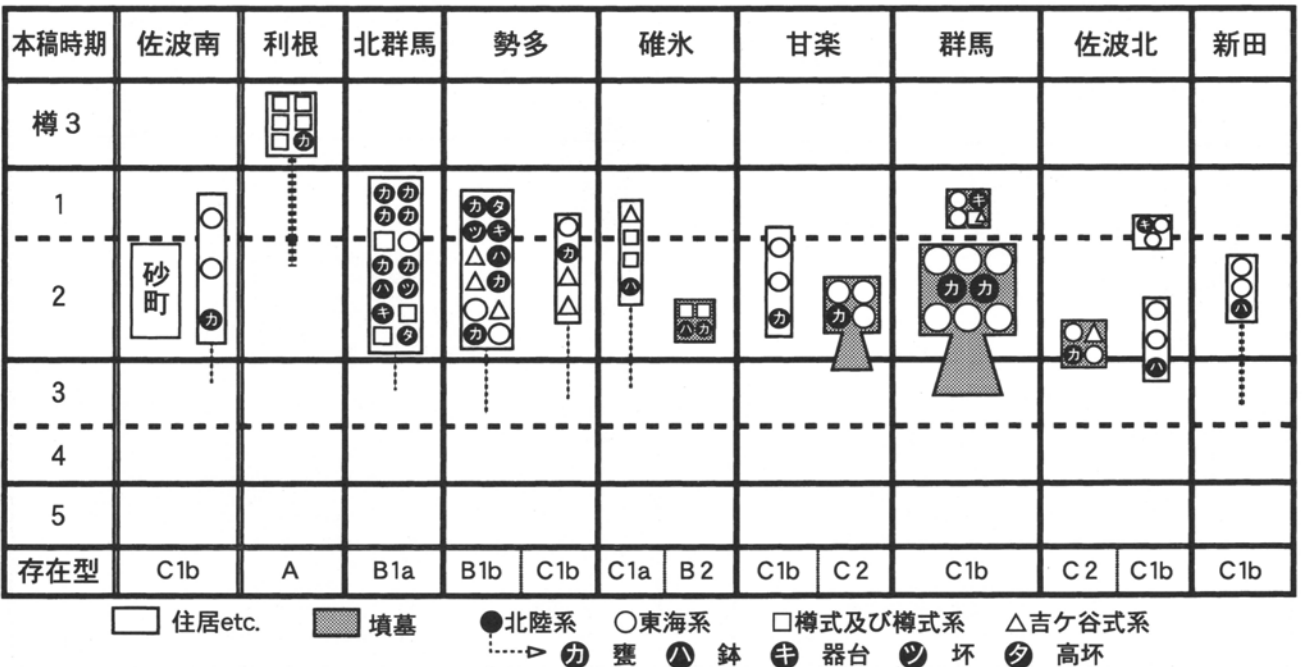


図17 群馬県各地域での北陸系土器のあり方



に北陸系土器が1～2器種で少数参入する型。指標は群馬地域（元島名将軍塚溝4例）の様相。

上記の存在型の「田口氏の類型」との関係は、B1型＝田口A類型、B2型＝田口B類型、A・C1・C2型＝田口C類型、となる。

#### 6)【作業1～3】から導かれる甕1・2の時間幅

群馬県各地域の北陸系土器の存在型は、時期・遺構・遺物量という視点から分類すると、上記の通り、分別できる。こうした5つの存在型から佐波南地域の様相に近いものは、C1b型である。その理由は次の通りである。

①時期…北陸系土器は「1～2期」に集中する。

②遺構…出土遺構には不明なものもあるが、明らかなものは全て集落関連遺構である。

③遺物量…外来系土器（特に東海系土器）が共伴する。器種は甕が圧倒的に多く、他器種がほとんどない。よって、主要器種が占有する状況は、現時点では考えにくい。

#### ※

ところで、関東各地における北陸系土器の動態に関しては、川村氏の一連の研究成果（川村1994・1998・1999）があるが、これによれば、群馬県内の北陸系土器の動態は、「第1波及期＝樽式3期」「第二波及期＝樽式系II～III段階」とされている。本稿における5つの存在型は、こうした川村氏の分析に、概ね矛盾するところがなく、一定の信憑性が保証されたと考えてよいと思う。

このことから、佐波南地域がC1b型という存在型を示すことは、周辺の他地域の存在型との関係においても、さらには、北陸系土器の動向に関する先行研究にも概ね合致し、大きな矛盾はないといえる。

したがって、この佐波南地域内に存在する、砂町遺跡甕1・2は、その編年の位置を、「本稿2期」「シンポ6期」におくことが、最も真実に迫っていると考え、このことを本稿の結論とする。

## 5 おわりに

本稿では、当初の目的通り、砂町遺跡出土の北陸系土器の編年の位置づけを行った。数多くの先行研究の成果に支えられながら、筆者としての一応の結論を導き出すことができたことには、ある種の達成感を覚える。しかしその反面、「北陸系土器が群馬県内で出土すること」の本質的意義の解明には、まだまだ多くの分析が必要であることを知った。

このことを真摯に受け止め、今後に継いでいきたい。

#### ※

本稿を草するに際して、次の方々に、ご助言・ご協力をいただきました。文末ながら、記して感謝の意を表します。ありがとうございました。

川村浩司・前山精明・渡辺ますみ・小池義人・三ツ井朋子・荒川隆史・谷内尾晋司・栃木英道・柿田祐司・青

木一男・井上太・田口一郎・若狭徹・小池雅典・真塩欣一・小峯篤・吉沢貴・横澤真一・大木紳一郎・坂井隆・友廣哲也・大西雅広・春山秀幸・斉藤幸男・小保方香里・反町るみ・竹内成美・渡辺博子・渡辺由美（敬称略）

#### 註

- 1) 本稿でいう「北陸系土器」とは、「①弥生時代後期～古墳時代前期に北陸地方でつくられた、北陸地方独自の在地性を有する土器」または「②弥生時代後期～古墳時代前期に、北陸地方独自の在地性を模倣しつつ、北陸地方以外の地でつくられた土器」のことを意味する。
- 2) この点に関しては、川村浩司氏からのご教示によるところが多い。
- 3) 胎土の白色指向は、古相の古式土器に見受けられる特徴でもある（若狭2000）。
- 4) 基準資料の提示は、田口氏の提示資料（田口1981）によるところが多い。
- 5) 形態的には類似しないが、口縁端部の緩やかな面取りや、頸部外面のヨコナデなどが、部分的に千種甕の要素が見受けられるものを指す。
- 6) 吉ヶ谷式系甕の型式変化については、赤城山南麓地域の資料で検証したものであり、厳密には他地域での採用には慎重にならなければならない。ただし、各地域の吉ヶ谷式系甕の様相を見る限り、変化の方向は、同一であると思われ、よって本稿では、便宜的に、この型式変化を採用することとした。
- 7) 筆者は、前稿（深澤1999）において、「赤井戸式I～IV段階」という呼称を用いた。しかし、従来「赤井戸式土器」と呼ばれていたものが「吉ヶ谷式系土器」の範疇で理解できると指摘（若狭2000）に、筆者自身が同意するため、本稿以降では「吉ヶ谷式系I～IV段階」と改称することとする。
- 8) 樽式・樽式系甕の一部には善光寺平地域によく見られる、肩部が発達した形態の甕（図12-3）も見られ、千曲川流域（青木一男氏区分の「I地域」）との親密性も示唆される（青木1998）。
- 9) 川村浩司氏及び小池雅典氏から、ご教示を受けた。
- 10) 有馬遺跡82号住居のS字甕（図13-4）は、田口編年I類の属性をもっているが、実物は樽式系甕類似の作りである。この資料にはS字甕製作の情報は入っているものの、存在主体となる力は弱いと感じられ、この段階（「1期」）の主軸をS字甕としなかった。
- 11) 川村浩司氏及び田口一郎氏・若狭徹氏から、ご教示を受けた。
- 12) 伊勢崎市・武占遺跡などは「1・2期」の中核資料となりそうである。
- 13) 碓氷地域については、今後の資料の蓄積により、様相が変わる可能性もあり得る。

#### 参考・引用文献

- 青木一男 1996「北平1号墳の時間的位置づけ」『大星山古墳群・北平1号墳』駒長野県埋蔵文化財センター
- 青木一男 1998「信濃における土器群の画期と交流 一箱清水式土器文化圏の庄内併行期を中心として」『庄内式土器研究』XVI
- 赤塚次郎 1990「V. 考察」『廻間遺跡』駒長野県埋蔵文化財センター
- 飯島克己・若狭徹 1988「樽式土器編年の再構成」『信濃』40-9
- 小田木治太郎 1991「北陸北東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学II』
- 笠原仁史 2001「角洲城遺跡」玉村町教育委員会
- 春日真実 1994「古墳時代前期の遺物」『一之口遺跡東地区』駒長野県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1998「緒立遺跡 弥生時代末～古墳時代の遺物 小結」『黒埼町史』資料編1
- 川村浩司 1993「北陸北東部における古墳出現前後の土器組成」『環日本海地域比較研究』2
- 川村浩司 1994「関東南部における北陸系土器の様相について」『庄内式土器研究』VI
- 川村浩司 1998「土器の交流からみる北陸地方と群馬県地域」『かみつけの里博物館 第2回特別展図録 人が動く・土器も動く』
- 川村浩司 1999「庄内並行期における上野出土の北陸系土器について」『庄内式土器研究』XIX

- 川村浩司 2000「上越市の古墳時代の土器様相 一関川右岸下流域を中心に」『上越市史研究』5
- 小池雅典 1994『町田小沢II遺跡』沼田市教育委員会
- 小島敦子 1995『荒砥上之坊遺跡Ⅰ』𪛇群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 小峯篤・吉沢貴 2000『山王若宮II遺跡』前橋市教育委員会
- 斉藤利昭 2001『亀里平塚遺跡・横手宮田遺跡・横手早稲田遺跡・横手南川端遺跡』𪛇群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坂井隆・大西雅広 1984「前橋市新堀町舟渡遺跡採集遺物について」『上毛野』創刊号
- 坂井秀弥・川村浩司 1993「古墳出現前後における越後の土器様相」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』
- 佐藤明人 1990『有馬遺跡II』𪛇群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋浩二 1995「北陸における古墳出現期の社会構造 一土器の計量的分析と古墳から一」『考古学雑誌』80-3
- 田口一郎 1981『元島名將軍塚古墳』高崎市教育委員会
- 田口一郎 1987「パレス・スタイル壺の末裔たち」『欠山式土器とその前後 研究・報告編』
- 田口一郎 1998「新たな土器が成り立つとき」『かみつけの里博物館 第2回特別展図録 人が動く・土器も動く』
- 田口一郎 2000「北関東西部におけるS字口縁甕の波及と定着」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』
- 田嶋明人 1986「漆町遺跡出土土器の編年の考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1988 発表要旨「北陸の「定型化」した古墳以前の墓制」『定型化する古墳以前の墓制』
- 田嶋明人 1993「北陸南西部の古墳確立期前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』
- 栃木英道 1994「能登地域の庄内式土器並行期の土器群の変遷 一基準資料にかえて一」『庄内式土器研究』VII
- 友廣哲也 1991「群馬県における古墳時代前期の土器様相」『群馬考古学手帳』2
- 友廣哲也 1996「群馬県の北陸土器と古墳時代集落の展開」『古代』102
- 中里正憲 2000「砂町遺跡における大畦畔の調査例」『群馬考古学手帳』10
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993「東日本における古墳出現過程の再検討』
- 橋本博文 1993「関東北部の古墳出現前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』
- 三浦京子 1991『上之手八王子遺跡』群馬県企業局・玉村町教育委員会
- 谷内尾晋司 1983「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』
- 吉岡康暢 1967「北陸における土師器の編年」『考古学ジャーナル』5
- 吉岡康暢 1991『日本海域の土器・陶磁器 [古代編]』六興出版
- 若狭徹 1990「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古学手帳』1
- 若狭徹 1998「群馬の弥生土器が終わるとき」『かみつけの里博物館 第2回特別展図録 人が動く・土器も動く』
- 若狭徹 2000「S字口縁甕波及期の様式変革と集団動態 一群馬県地域の場合一」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』
- 深澤敦仁 1998「上野における土器の交流と画期」『庄内式土器研究』XVI
- 深澤敦仁 1999「赤井戸式」土器の行方」『群馬考古学手帳』9

#### 図版作成文献（上記以外）

- 相京建史・小島敦子ほか 1993『新保田中村前遺跡III』𪛇群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 新井仁 1995『内匠日向周地遺跡』𪛇群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 安中市史刊行委員会 2001『安中市史 第4巻 原始古代中世資料編』
- 飯島克巳・若狭徹 1985『諸口遺跡III』群馬町教育委員会
- 飯田祐二・佐藤則和 1998『山王若宮遺跡』前橋市教育委員会
- 井川達雄・大西雅広 1989『舟橋遺跡』𪛇群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石守晃・山口逸弘 1985『糸井宮前遺跡Ⅰ』𪛇群馬県埋蔵文化財調査事業団

- 伊藤肇・依田治雄 1992『南蛇井増光寺遺跡Ⅰ』𪛇群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 梅澤重昭 1978『五反田・諏訪下遺跡』太田市教育委員会
- 大賀健ほか 1983『倉賀野万福寺遺跡』高崎市倉賀野万福寺遺跡調査会
- 尾崎喜左雄・今井新次・松島榮治 1968『石田川』『石田川』刊行会
- 神戸聖語ほか 1979『引間遺跡』高崎市教育委員会
- 神戸聖語ほか 1989『八幡遺跡』高崎市教育委員会
- 菊池健一 1984『諸口古墳調査概報』群馬町教育委員会
- 久保泰博・渡辺義泰 1983『上大類北宅地遺跡』高崎市教育委員会
- 群馬県史編さん委員会 1981「喜多町遺跡」『群馬県史 資料編 2』
- 腰塚徳司・東宏和 1997「東八木遺跡、阿曾岡・権現堂遺跡」富岡市教育委員会
- 小島純一 1988『堤頭遺跡』粕川村教育委員会
- 小林修・長井正欣 2001『三原田三反田遺跡』赤城村教育委員会
- 坂井隆・飯塚卓二 1984『熊野堂遺跡III地区・雨壺遺跡』𪛇群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坂口一 1989『有馬条里遺跡Ⅰ』𪛇群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坂口一 1999『三和工業団地Ⅰ遺跡(2) 一縄文・古墳・奈良・平安時代他編一』𪛇群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 桜井衛・林秀子 1990『上滝社宮司東・斉田北遺跡 下滝高井前・赤城遺跡』高崎市遺跡調査会
- 佐藤明人ほか 1981『八幡原A・B 上滝 元島名A』𪛇群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤明人 1988『新保遺跡II 弥生・古墳時代集落編』𪛇群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤明人 1991『萱野遺跡・下田中遺跡・矢場遺跡』群馬県企業局
- 関口修・池田敬 1998『豊岡後原Ⅰ・Ⅱ遺跡』高崎市教育委員会
- 園部守央・加部二生 1989『内堀遺跡群II』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 高崎市史編さん委員会 2000『新編 高崎市史 資料編2 原始古代II』
- 田口一郎 1991「喜多町遺跡」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』
- 角田芳昭 2001『波志江中野面遺跡(1) 一古墳時代以降編一』𪛇群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 新倉明彦・三浦京子 1990『戸神諏訪遺跡』𪛇群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 能登健 1982『荒砥上川久保遺跡』𪛇群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 長谷川福次 1996『北町遺跡・田ノ保遺跡』北橋村教育委員会
- 巾隆之・下城正ほか 1989『門前橋詰・外海戸遺跡 高野原遺跡』𪛇群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 廣津英一 1998『柴崎熊野前遺跡』𪛇群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 前原豊・綿貫鋭次郎 1978『竹沼遺跡』藤岡市教育委員会
- 松島榮治・松本浩一・相川貞順ほか 1984『芳賀東部団地遺跡Ⅰ』前橋市教育委員会
- 松田猛ほか 1985『堤東遺跡』群馬県教育委員会
- 松田政基ほか 1994『天神Ⅰ遺跡・天神Ⅱ遺跡・西原遺跡・松葉慈学寺遺跡』甘楽町教育委員会
- 横田公男 1994『一ノ宮押出遺跡』富岡市教育委員会
- 若狭徹 1989『保渡VII遺跡(1)』群馬町教育委員会